

令和 7 年 度

植 物 防 疫 年 報

福岡県農林業総合試験場病虫害部予察課
(福岡県病虫害防除所)

目 次

第1 福岡県農林業総合試験場病害虫部予察課（病害虫防除所）の概要

I 沿革	1
II 所在地	1
III 管轄区域	1
IV 業務体制	
1 組織体制	2
2 業務内容	2
3 病害虫防除員の設置	3

第2 業務実績

I 病害虫発生予察	
1 発生予察調査	
（1）対象病害虫	4
（2）調査の種類および調査地点	6
2 気象概況	
（1）気象概況	7
（2）気象図	8
3 農作物の生育概況	
（1）普通作物	9
（2）果樹	9
（3）野菜	10
（4）特用作物	10
4 主要病害虫の発生および防除状況	
（1）主要病害虫の発生経過、要因解析および防除指導	11
（2）主要病害虫の発生面積および防除面積	35
II 情報の提供実績	
1 情報の種類と発表回数	
（1）情報の種類	37
（2）発表回数	37
2 情報の発表状況	
（1）発生予報	38
（2）注意報	39
（3）特殊報	39
（4）速報	39
（5）技術情報	39
3 情報の提供先	40
4 情報の概要	
（1）注意報	41
（2）特殊報	42

Ⅲ 国内検疫事業

1 侵入調査事業

(1) ミカンコミバエ種群、ウリミバエ、セグロウリミバエ、クインスランドミバエ、チチュウカイミバエ・・・・・・・・・・・・・・・・	4 4
(2) コドリंगा・・・・・・・・・・・・・・・・	4 7
(3) トマトキバガ・・・・・・・・・・・・・・・・	4 7
(4) <i>Meloidogyne enterolobii</i> 、columnnea latent viroid (CLVd)、tomato brown rugose fruit virus (ToBRFV)、トマト退緑萎縮ウイルス (TCDVd)、tomato leaf curl New Delhi virus (ToLCNDV)、tomato mottle mosaic virus (ToMMV)、tomato apical stunt viroid (TASVd)、pepper chat fruit viroid (PCFVd)、pepino mosaic virus (PepMV)、バナナネモグリセンチュウ、コロンビアネコブセンチュウ、ジャガイモやせいもウイルス (PSTVd)、カンキツネモグリセンチュウ・・・・・・・・	4 8
(5) 火傷病菌・・・・・・・・・・・・・・・・	4 8
(6) カンキツグリーニング病、 <i>Spiroplasma citri</i> 、 <i>Xylella fastidiosa</i> ・・・・・・・・	4 8
(7) イネミイラ穂病菌、イネ条斑細菌病菌、イネクキセンチュウ・・・・・・・・	4 8
(8) テンサイシストセンチュウ・・・・・・・・・・・・・・・・	4 9
(9) ヘシアンバエ、 <i>Ramularia collo-cygni</i> ・・・・・・・・・・・・・・・・	4 9
(10) スイカ果実汚斑細菌病・・・・・・・・・・・・・・・・	4 9
(11) インゲンマメ萎凋細菌病・・・・・・・・・・・・・・・・	4 9
(12) ウメ輪紋ウイルス・・・・・・・・・・・・・・・・	4 9

Ⅳ 病虫害防除対策

1 問題となっている病虫害に関する調査

(1) ヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫検定・・・・・・・・	5 0
(2) 水稻種子のいもち病およびもみ枯細菌病感染状況調査・・・・・・・・	5 1
(3) キウイフルーツかいよう病 Psa 3 系統発生拡大への対応・・・・・・・・	5 2
(4) イチゴ炭疽病潜在感染株 (親株) 調査・・・・・・・・・・・・・・・・	5 2
(5) イチゴ炭疽病の薬剤感受性検定・・・・・・・・・・・・・・・・	5 3
(6) トマトにおけるタバココナジラミのウイルス保毒虫検定・・・・・・・・	5 3
(7) キュウリにおけるタバココナジラミの薬剤感受性検定・・・・・・・・	5 4

2 病虫害診断

(1) 作物別依頼件数と診断結果・・・・・・・・・・・・・・・・	5 5
----------------------------------	-----

第1 福岡県農林業総合試験場病虫害部予察課（病虫害防除所）の概要

I 沿革

- 昭和 16 年（1941 年） 病虫害発生予察事業が始まる
農事試験場を中核として、県内 7 か所に観測所を設置
- 昭和 22 年（1947 年） 観測所を県下 6 か所とし、観察員を各 1 名配置
- 昭和 27 年（1952 年） 本庁及び地方事務所に 17 か所の病虫害防除所を並置
- 昭和 30 年（1955 年） 地方事務所の廃止に伴い、病虫害防除所を農林事務所、農業改良普及所に移転
- 昭和 45 年（1970 年） 病虫害防除所を各農林事務所 6 か所に統合
- 平成 元年（1989 年） 6 か所の病虫害防除所を本所及び 2 支所（筑後、行橋）に統合
- 平成 18 年（2006 年） 残留農薬分析室を整備
- 平成 26 年（2014 年） 組織再編に伴い農林業総合試験場 病虫害部予察課として配置

II 所在地

農林業総合試験場 病虫害部予察課
〒818-8549 筑紫野市大字吉木 587
TEL (092) 924-0062 FAX (092) 928-6404

III 管轄区域

管 轄 区 域	市町村数	農協数
【福岡農林管内】 福岡市、筑紫野市、春日市、大野城市、宗像市、太宰府市、古賀市、福津市、糸島市、那珂川市、宇美町、篠栗町、志免町、須恵町、新宮町、久山町、粕屋町 【朝倉農林管内】 久留米市、小郡市、うきは市、朝倉市、筑前町、東峰村、大刀洗町 【飯塚農林管内】 直方市、飯塚市、田川市、宮若市、嘉麻市、小竹町、鞍手町、桂川町、香春町、添田町、糸田町、川崎町、大任町、赤村、福智町 【筑後農林管内】 大牟田市、柳川市、八女市、筑後市、大川市、みやま市、大木町、広川町 【八幡農林管内】 北九州市、中間市、芦屋町、水巻町、岡垣町、遠賀町 【行橋農林管内】 行橋市、豊前市、荻田町、みやこ町、吉富町、上毛町、築上町	60	20

IV 業務体制

1 組織体制

病虫害部

部長：石井 貴明
(所長兼務)

予察課

(8名)

課長：森山 弘信

副 長：古賀 由利香

企画主査：末信 真二

技術主査：嶽本 良子

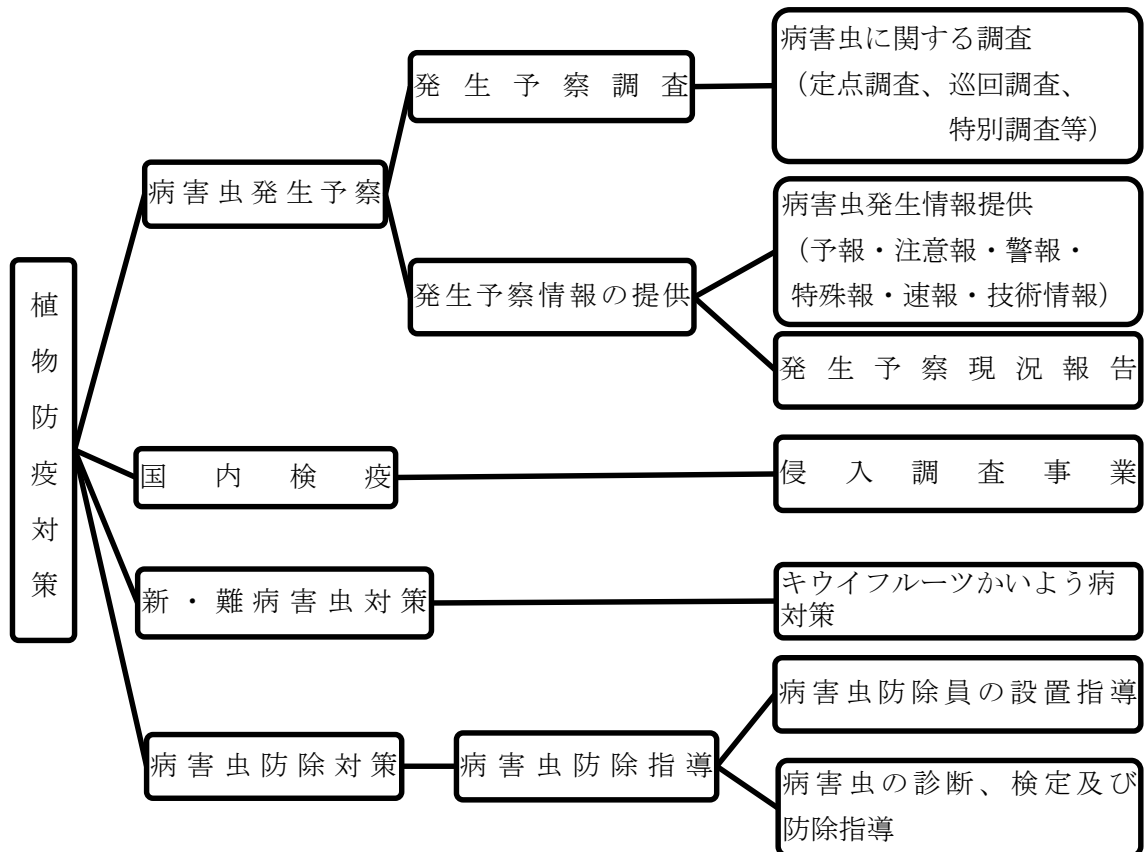
技術主査：土谷 俊弘

技術主査：小田 哲嗣

技術主査：吉永 文浩

主任技師：坂井 妙子

2 業務内容



3 病虫害防除員の設置

植物防疫の施設に関する条例（昭和 27 年 7 月 31 日条例第 42 号）及び福岡県病虫害防除員の任用、勤務条件等に関する要綱（令和 7 年 4 月 1 日施行）に基づき、農作物の栽培面積や病虫害の発生動向等を考慮し、22 名の病虫害防除員（普通作物 6 名、果樹 11 名、野菜 3 名、特用作物 2 名）を設置した。

防除員の管轄は市町村区域とし、発生予察調査及び防除指導等を行った。

病虫害防除員活動実績一覧

担 当 作 物		担当市町	活 動 日 数		
			病虫害調査日数 (日/人)	防除指導日数 (日/人)	人数
普通作物	水稻＋大麦＋小麦＋大豆	久留米市	18	2	1
	水稻＋小麦＋大豆	大川市	17	2	3
		宮若市			
		みやま市			
	水稻＋大麦	築上町	12	2	1
	水稻＋大豆	上毛町	13	2	1
(小計)					(6)
果樹	かんきつ	八女市	14	2	3
		宗像市			
		みやま市			
	なし	久留米市	11	2	5
		筑後市			
		行橋市			
		嘉麻市			
		朝倉市			
	かき	うきは市	13	2	2
		朝倉市			
	ぶどう	宮若市	10	2	1
(小計)					(11)
野菜	冬春イチゴ	宗像市	10	2	2
		嘉麻市			
	冬春ナス	みやま市	7	2	1
(小計)					(3)
特用作物	茶	八女市	8	2	2
合計			7～18 日/人	2 日/人	22

第2 業務実績

I. 病害虫発生予察

1 発生予察調査

(1) 対象病害虫

ア 指定病害虫

国内における病害虫の発生が局地的でなく、かつ、急激にまん延して農作物に重大な損害を与える傾向があるため、特別の対策を要するものとして農林水産大臣が指定するもの。

イ 指定外病害虫

指定病害虫以外の有害動植物について重要な病害虫として知事が定めるもの。

調査対象病害虫一覧

	農作物名	指定病害虫名	指定外病害虫名
普通作物	水稻 (早期)	トビイロウンカ、ヒメトビウンカ、セジロウンカ、ツマグロヨコバイ、斑点米カメムシ類、スクミリンゴガイ	—
	水稻 (普通期)	いもち病、ばか苗病、ごま葉枯病、もみ枯細菌病、苗立枯病、紋枯病、稲こうじ病、縞葉枯病、白葉枯病、トビイロウンカ、セジロウンカ、ヒメトビウンカ、ツマグロヨコバイ、コブノメイガ、斑点米カメムシ類（クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシ、ミナミアオカメムシ、アオクサカメムシ、イネカメムシ、アカスジカスミカメ）、スクミリンゴガイ、イネミズゾウムシ、フタオビコヤガ、ニカメイガ、イネドロオイムシ	心枯線虫病、イネクロカメムシ
	大麦	赤かび病、さび病類、うどんこ病	縞萎縮病、斑葉病、網斑病、黒穂病類
	小麦	赤かび病、さび病類、うどんこ病	縞萎縮病、黒穂病類、黄斑病、シロトビムシ類
	大豆	紫斑病、アブラムシ類、ハスモンヨトウ、吸実性カメムシ類（アオクサカメムシ、イチモンジカメムシ、ホソヘリカメムシ、ミナミアオカメムシ）、フタスジヒメハムシ、マメシンクイガ	葉焼病、べと病、さび病
果	かんきつ	かいよう病、そうか病、黒点病、ミカンハダニ、チャノキイロアザミウマ、アブラムシ類	—
樹	なし	黒星病、黒斑病、赤星病、ハダニ類、カイガラムシ類、アブラムシ類、シンクイムシ類（ナシヒメシンクイ、モモシンクイガ）、ハマキムシ類	—

	農作物名	指定病害虫名	指定外病害虫名
果 樹	かき	炭疽病、カキクダアザミウマ、フジコ ナカイガラムシ、ハマキムシ類、カキ ノヘタムシガ	—
	ぶどう	灰色かび病、べと病、晩腐病、アザミ ウマ類	黒とう病、褐斑病
	キ ウ イ フルーツ	かいよう病	—
野 菜	冬春イチゴ	灰色かび病、うどんこ病、炭疽病、ア ザミウマ類、ハダニ類、アブラムシ 類、コナジラミ類	萎黄病、菌核病、チョウ目害虫
	冬春トマト	灰色かび病、葉かび病、疫病、すすか び病、うどんこ病、黄化葉巻病、コナ ジラミ類、アブラムシ類、アザミウマ 類	ハモグリバエ類
	冬春ナス	灰色かび病、うどんこ病、すすかび 病、アザミウマ類（ミナミキイロアザ ミウマ）、アブラムシ類、ハダニ類	コナジラミ類、ハモグリバエ類
	冬キャベツ	黒腐病、菌核病、アブラムシ類、モン シロチョウ	軟腐病、べと病、ウワバ類
	冬レタス	灰色かび病、菌核病、アブラムシ類	—
特 用 作 物	茶	炭疽病、ハダニ類（カンザワハダ ニ）、チャノキイロアザミウマ、チャ トゲコナジラミ、クワシロカイガラム シ、チャノミドリヒメヨコバイ、ハマ キムシ類（チャノコカクモンハマキ、 チャハマキ）、チャノホソガ	もち病
作 物 共 通	—	ハスモンヨトウ、オオタバコガ、コナ ガ、シロイチモジヨトウ、果樹カメム シ類	—

(2) 調査の種類および調査地点

病虫害発生予察に係る調査は、定点調査、巡回調査、特別調査とした。

調査は場は、各農作物の品種や作型などの栽培条件、気象条件を踏まえて選定し、農作物の主要産地ごとに設け、市町村や農業協同組合の管轄区域を考慮して配置した。

発生予察に係る調査地点一覧

作物 部門	農作物名	区分	予察調査は		防除適期決定は等	
			病虫害部予察課等	防除員	予察灯	フェロモントラップ
普通 作	水稲	定点	予察灯 1 (筑紫野市)	—	ウンカ等 4 (糸島市、遠賀町、 菊田 町、みやま市)	コブノメイガ 1 (筑紫野市)
		巡回	48	6	—	—
		特別	ウンカ類飛来状況調査 5 ヒメトビウンカ保毒虫検定 16 斑点米カメムシ類発生状況調査 5 種子伝染性病害保菌率 (いもち病179、もみ枯細菌病64)	—	—	—
	大麦	巡回	11	2	—	—
	小麦	巡回	16	4	—	—
		特別	16	—	—	—
	大豆	巡回	12	5	—	—
		特別	12	—	—	—
果 樹	かき	巡回	9	2	—	—
	かんきつ	巡回	8	3	—	—
	ぶどう	巡回	4	1	—	—
	なし	巡回	7	5	—	—
		特別	赤星病中間寄主 3	—	—	—
	キウイフルーツ	特別	2	—	—	—
野 菜	冬春イチゴ	巡回	育苗期・本ば 12	2	—	—
		特別	親株 12	—	—	—
	冬春トマト	巡回	6	—	—	—
		特別	コナジラミ類保毒虫検定 1	—	—	—
	冬春ナス	巡回	6	1	—	—
	冬レタス	巡回	6	—	—	—
	アスパラガス	巡回	3	—	—	—
	冬キャベツ	巡回	7	—	—	—
	野菜共通	定点	黄色粘着板トラップ コナジラミ類 3 (筑紫野市、筑後市、うきは市)	—	—	—
			—	—	—	オオタバコガ 5 (大刀洗町、 みやま市、広川町、北九州市、 福岡市)
特用 作物	茶	巡回	8	2	—	—
		定点	—	—	—	ハマキムシ類 2 (八女市)
作物 共通	作物共通	定点	フェロモントラップ ハスモンヨトウ 1 (筑紫野市)	—	—	ハスモンヨトウ 2 (筑後市、 行橋市)
		定点	予察灯 果樹カメムシ類 2 (筑紫野市、八女市)	—	果樹カメムシ類 4 (久留米市、うきは市、朝 倉市、飯塚市)	チャバネカメムシ・ハマキムシ類・シツイ ムシ類 8 (宗像市 1、うきは市 3、朝倉市 2、八女市 2)
		定点	フェロモントラップ 果樹カメムシ類 1 (筑紫野市)	—	—	—
		特別	越冬密度:チャバネカメムシ 30 餌作物着生量調査:ヒノキ球果 46 ピーティング調査:ヒノキ球果 14 口針鞘数調査:ヒノキ球果 14	—	—	—
合 計		定点	8か所	0か所	8か所	18か所
		巡回	163か所	33か所	0か所	0か所
		特別	419か所	0か所	0か所	0か所

2 気象概況

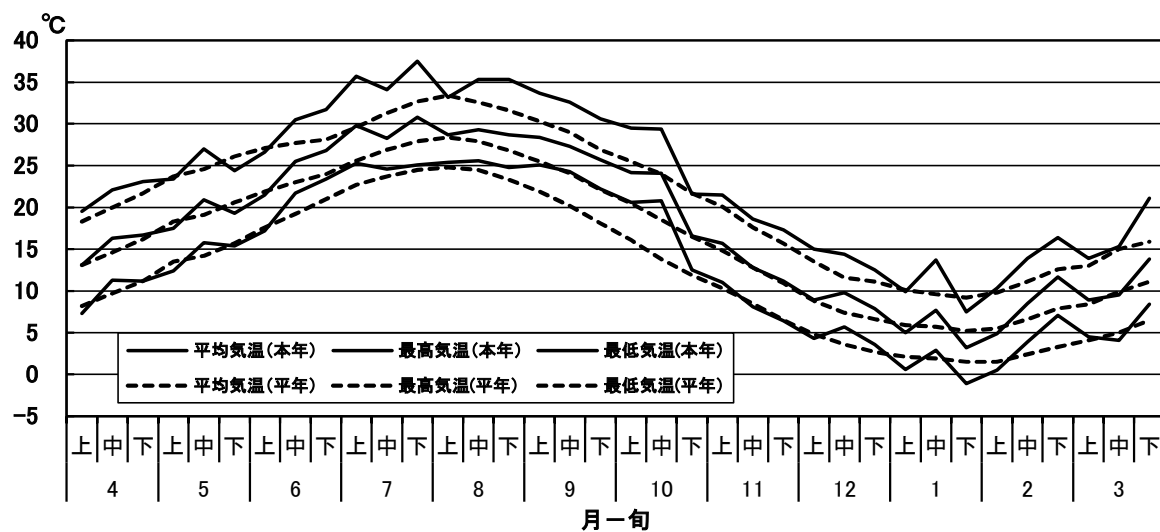
(1) 気象概況（令和7年4月～令和8年3月）

4 月			5 月			6 月		
平均気温	降水量	日照時間	平均気温	降水量	日照時間	平均気温	降水量	日照時間
高い	かなり少ない	かなり多い	平年並	多い	少ない	かなり高い	多い	平年並
天気は数日周期で変化し、低気圧や気圧の谷の影響による降雨日もあったが、高気圧に覆われて晴れた日が多かった。13～15日にかけては、寒気の影響で気温が平年より低くなった。 気温は平年差 0.3～0.9℃、降水量は平年比 26～52%、日照時間は平年比 113～123%となった。			天気は上旬を中心に高気圧に覆われて晴れた日があったが、低気圧や前線の影響で曇りや雨の日もあり、大雨となった所もあった。下旬は、寒気の影響で気温が低くなった。 気温は平年差-0.6～-0.2℃、降水量は平年比 128～249%、日照時間は平年比 81～92%となった。			天気は数日周期で変化し、高気圧に覆われ晴れた日があったが、梅雨前線や湿った空気の影響で曇りや雨の日もあり、大雨となった日もあった。中～下旬は、暖かい空気に覆われやすく気温は平年差 1.1～1.8℃、降水量は平年比 79～160%、日照時間は平年比 102～114%となった。		
7 月			8 月			9 月		
平均気温	降水量	日照時間	平均気温	降水量	日照時間	平均気温	降水量	日照時間
かなり高い	かなり少ない	かなり多い	高い	多い	多い	かなり高い	少ない	少ない
天気は、中旬は熱帯低気圧や暖かく湿った空気の影響で雨が降り、17～19日は大雨となった所があったが、高気圧に覆われて晴れた日が多かった。7月の日本の月平均気温は、統計開始以降最も高くなった。 気温は平年差 1.9～2.9℃、降水量は平年比 6～34%、日照時間平年比 161～196%となった。			天気は、高気圧に覆われて晴れた日が多かったが、7～12日にかけて前線や湿った空気の影響で曇りや雨となった。特に9～10日にかけて低気圧を伴った停滞前線に向かって暖かく湿った空気が流れ込んだ影響で、線状降水帯が発生し記録的な大雨となった。気温は平年差 0.8～1.5℃、降水量は平年比 89～374%、日照時間平年比 103～122%となった。			天気は数日周期で変化した。10日と17～18日は前線と前線に向かって暖かく湿った空気が流れ込んだ影響で大雨となった所があった。暖かい空気に覆われやすく、前線に向かって暖かく湿った空気が流れ込んだため、気温がかなり高くなった。 気温は平年差 2.7～3.4℃、降水量は平年比 42～116%、日照時間は平年比 72～93%となった。		
10 月			11 月			12 月		
平均気温	降水量	日照時間	平均気温	降水量	日照時間	平均気温	降水量	日照時間
かなり高い	多い	少ない	高い	少ない	多い	高い	平年並	平年並
天気は、数日周期で変化した。4日は低気圧や前線の影響で大雨となった所があった。上中旬を中心に暖かい空気に覆われたため、県内全域でかなり高温となった。 気温は平年差 1.9～3.3℃、降水量は平年比 62～153%、日照時間は平年比 87～98%となった。			天気は数日周期で変化したが、高気圧に覆われて晴れた日が多かった。 気温は平年差 0.1～0.6℃、降水量は平年比 8～38%、日照時間は平年比 109～120%となった。			天気は、上旬は高気圧に覆われて晴れた日が多かった。中旬以降は数日の周期で変化した。25日に初雪が観測された。 気温は平年差 1.0～1.5℃、降水量は平年比 40～117%、日照時間は平年比 103～128%となった。		
1 月			2 月			3 月		
平均気温	降水量	日照時間	平均気温	降水量	日照時間	平均気温	降水量	日照時間
平年並	かなり少ない	かなり多い	高い	かなり多い	多い	高い	多い	多い
天気は、寒気や気圧の谷の影響で降雪日もあったが、高気圧に覆われて晴れた日が多かった。 気温は平年差-0.5～0.2℃、降水量は平年比 5～30%、日照時間は平年比 137～169%となった。			天気は、上旬は気圧の谷や寒気の影響で曇りの日が多く、7～8日には雪が降った。その後は高気圧に覆われ晴れた日が多かったが、下旬は低気圧や気圧の谷の影響で雨が降った。22日に「春一番」が吹いた。 気温は平年差 1.5～2.0℃、降水量は平年比 88～165%、日照時間は平年比 103～128%となった。			天気は、規則的に通過する高気圧と低気圧の影響を受け、晴れの日と雨の日が周期的に出現した、雨の日よりも高気圧に覆われた晴れの日が多かった。 気温は平年差 0.5～1.5℃、降水量は平年比 87～146%、日照時間は平年比 116～133%となった。		

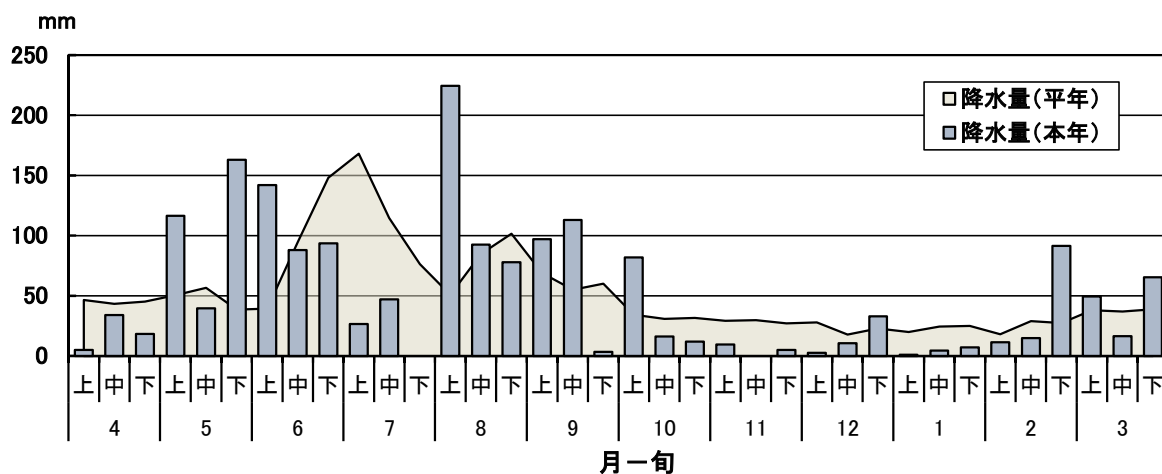
注1) 福岡管区気象台による福岡県気象月報から抜粋。なお、表中の平均気温、降水量、日照時間は気象台観測地点・福岡における本年値と平年値との比較によるもの。

(2) 気象図 (太宰府アメダス、令和7年4月～令和8年3月)

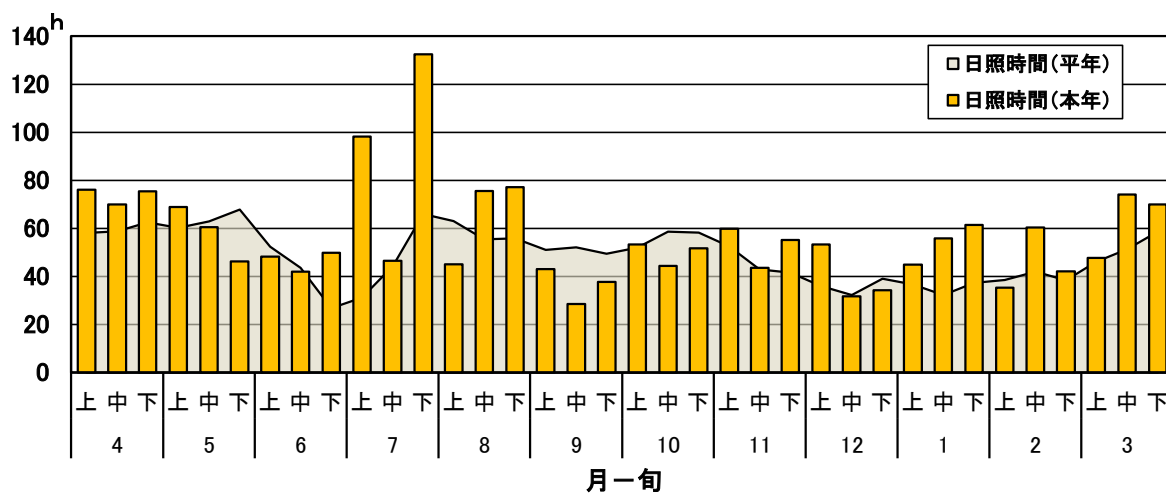
① 気温の推移



② 降水量の推移



③ 日照時間の推移



3 農作物の生育概況

(1) 普通作物

ア 水稻（令和7年度米・麦・大豆生産改善情報第2号より抜粋）

6月下旬からの多照によって、穂数が前年に比べ多く確保された。それ以降も天候に恵まれたことから、全もみ数は前年に比べ「やや多い」となった。出穂期以降も高温多照に経過したことから、登熟は前年に比べ「やや良」となり、作況単収指数107となった。

イ 麦類（令和7年産）（令和7年度米・麦・大豆生産改善情報第1号より抜粋）

播種期は、断続的な降雨や前作の大豆収穫の遅れの影響により、播種最盛期は前年に比べて小麦で3日遅く、大麦では1日早くなった。出芽も播種の遅れによりやや遅れたものの、その後の生育は順調であった。12月中旬～2月中旬は低温で経過し、草丈が低くなった。少雨で経過したため、踏圧、土入れなどの管理作業は着実に施され、茎数は平年並～やや多くなった。3月以降は多照少雨で経過し、気温上昇に伴い、生育は順調に推移し、穂数も平年並に確保された。出穂最盛期は初期生育の遅れが大きく影響し、前年に比べて小麦で6日、大麦で5日程度遅くなった。しかし、出穂期以降は好天に恵まれ、登熟は良好であった。生育がやや遅れ気味に推移したため、刈取最盛期は前年に比べて小麦、大麦ともに8日程度遅くなった。収穫は、一部降雨があったもののおおむね順調に終了した。

ウ 大豆（令和7年度米・麦・大豆生産改善情報第2号より抜粋）

播種は、県北地域で6月下旬頃、県南地域では7月上旬頃から開始された。最盛期は7月5日頃で、7月末までにはほぼ終了した。出芽・苗立ちは順調であったが、6月下旬の乾燥、7月上旬中旬のまとまった降雨の影響により一部で出芽不良が発生した。梅雨明け後は高温多照で乾燥が続き、初期生育は抑制され、主茎長はやや短くなった。中耕・培土作業はおおむね実施された。8月9～12日の記録的大雨で、県北部では浸冠水による枯死や生育不良がみられた。分枝数はやや多く、㎡当たり莢数もやや多くなった。開花期は、7月10日播きで8月23日頃、7月25日播きで9月4日頃と昨年よりやや遅かった。葉の黄化は、7月上中旬の適期播きで10月20日頃から始まり、落葉期は11月3日頃と、昨年よりやや遅れた。

(2) 果樹（令和7年度専門委員会資料、生産対策会議資料、専技情報より抜粋）

ア かんきつ（温州みかん）

発芽は平年より遅～やや早（－3～＋6日）で、開花は平年より8日程遅かった。着花数は、極早生は並～やや多、早生は並、普通は並～やや多であった。着果量は、極早生・早生は並～やや多、普通はやや少～並であった。果実肥大は、全ての作柄で並～良好。糖度は平年並で、大玉ではやや低い傾向。一部園地にてルビーロウムシ、ナシマルカイガラムシ、ウスカワマイマイ、カネタタキ等による被害が発生した。

イ なし

露地作型において、満開日は「幸水」が4月9～12日、「豊水」が4月6～9日で、前年・平年より遅かった。果実横径は平年よりやや小～並であった。露地「幸水」は、果実肥大はやや小玉傾向で、着果量は良。病虫害の被害は軽微であったこと、生育時に好天が多かったことにより、収量は平年より多く、食味は良好であった。また高温の影響で、「新高」などで果肉障害が発生した。

ウ かき

展葉期は平年より2～6日程度遅く、開花期は平年より7日程早かった。「富有」では雌花の着生は平年並であった。結果率は、「早秋」、「富有」「秋王」等で、平年並～やや多であった。果実肥大は、富有で平年より小さかった。着色は平年よりやや劣った。収穫盛期は「富有」では平年より7日程度遅かった。軟果、ヘタスキ果はやや多く発生した。出荷量は前年を下回った。糖度は平年並であった。

(3) 野菜

ア 冬春イチゴ（令和7年度いちご生産販売振興対策会議より抜粋）

育苗期は、3月下旬からの肥料切れによるランナー発生遅延、梅雨明け後の高温による根張り不良が発生した。定植期は、夜温低下の遅れから花芽分化が遅滞、普通作型を中心に定植が9月末～10月上旬へとずれ込んだ。定植後は、高温と降雨により草勢が強まった。10月以降の高温で、早期作型の出荷は前年より5～7日早まり、11月の出荷量は昨年を上回ったものの、果形不良や小玉傾向が目立った。普通作型は定植の遅れから年内の出荷ピークを形成できず、12月の出荷量は前年を大きく下回った。厳寒期に入ると、1月の寒波で草勢が低下し着色が停滞したため、2月下旬まで出荷ペースの低い状態が続いた。3月に入ると夜温の上昇に伴い、3月下旬に出荷のピークを迎えた。3番果房の出蕾・開花が早まり収穫の谷間は浅くなったが、終盤は成り疲れや急激な気温上昇の影響により、不受精果や先細り果、日焼け果が発生した。

イ 冬春トマト（令和7年度トマト生産対策会議資料より抜粋）

夏期～秋期にかけて異常高温と乾燥が続く、長期作の産地では、活着や初期生育に支障が生じた他、裂果・裂皮が多発した。促成作の産地でも、高温・乾燥の影響を受け、活着や初期生育が抑制されたが、11月以降の気温低下により、草勢は回復基調となった。厳寒期は、相次ぐ寒波によって、生育は緩慢となり着果負担や着色不良が見られた。3月下旬以降の気温上昇に伴い、生育が促進された。

ウ 冬春ナス（令和7年度なす部会全体協議会資料より抜粋）

定植期の8～11月中旬まで高温が続く、定植遅れや活着不良、樹勢低下となった。10月は前進出荷によって出荷数量が増え、反動で11月は出荷数量が減少した。12～3月中旬までは天候不順の影響で出荷数量が不安定であったが、4月以降の多照で樹勢が回復、出荷数量も増加した。品質面では、高温によるボケ果・ブク果、厳寒期の細果や曲がり果が散見された。

エ 冬キャベツ（各普及指導センターからの情報）

播種は早い地点で7月下旬に開始されたが、8月10日の大雨によって、苗の冠水や育苗ハウスへの浸水がみられ、定植株が不足した。育苗期に高温が続いたことで、苗の徒長や生育不良が発生した。8月下旬～9月上旬定植において、乾燥による枯死が散見されたものの、9月中旬以降の適度な降雨によって、生育は順調に推移した。11月以降は降雨不足による過乾燥で生育が停滞し、12月収穫分を中心に遅れが生じ、一部小玉傾向となった。

オ 冬レタス（各普及指導センターからの情報）

7月中旬～9月は、高温乾燥の影響により、播種・育苗時には発芽不良、定植後には葉焼け、根傷みによる枯死が散見された。秋口のチョウ目害虫の被害は昨年、一昨年に比較して軽微であったが、10月上旬の大雨により、一部地域で浸冠水したほ場もあり、斑点細菌病や湿害が発生した。年内は平年を上回る気温と少雨が続き、その後の生育は個体間のばらつきが大きくなった。1月以降の気温低下と継続的な乾燥による生育遅延がみられた。

(4) 特用作物

ア 茶（農林試八女分場 令和7年度萌芽生育状況報告、実収報告より抜粋）

萌芽期は4月8日で前年より2日遅く、過去5か年平均値に比べ4日遅かった。八女分場作況園における一番茶摘採日は5月6日で前年より8日遅く、過去5か年平均値より4日遅かった。二番茶摘採日は6月18日で、平年より2日、前年より5日遅かった。一番茶摘採から二番茶摘採までに要した期間は43日で、平年より1日、前年より3日短かった。一番茶の生葉収量は394kg/10aで平年比59%、前年比78%であった。二番茶の生葉収量は496kg/10aで平年比77%、前年比105%であった。

4 主要病害虫の発生および防除状況

(1) 主要病害虫の発生経過、要因解析および防除指導

ア 普通作物

(ア) 普通期水稻 (2025 年 6 ～ 9 月)

a いもち病 (葉いもち：並、穂いもち：やや多)

(a) 発生経過

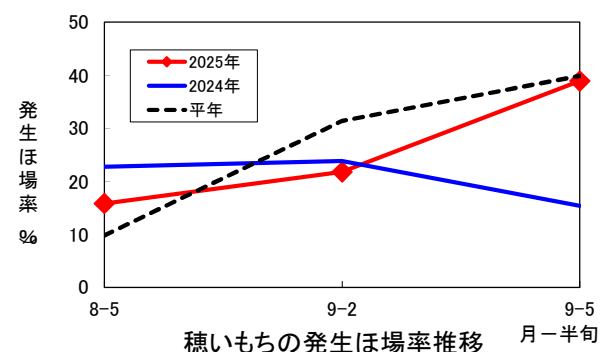
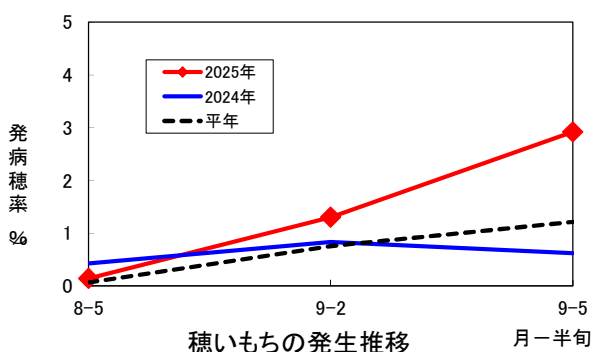
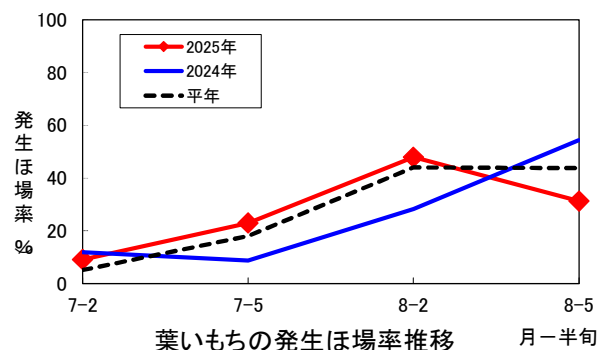
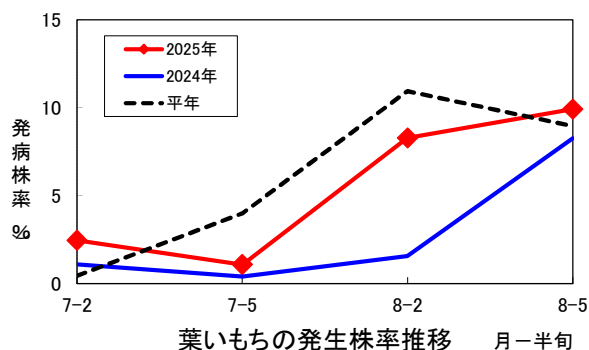
- ・【葉いもち】7月2半旬に発生が認められ、7月5半旬～8月2半旬にかけて増加し、8月5半旬には平年並となった。
- ・【穂いもち】8月5半旬に発生が認められ、以降、中山間部や極早生種を中心に発生が認められ、平年よりやや多く推移した。

(b) 要因解析

- ・【葉いもち】7月は高温少雨傾向であったが、8月1～3半旬の降雨が多かったため、葉いもちの発生は平年並となった。
- ・【穂いもち】8～9月の降雨が多かったため、穂いもちの発生は平年よりやや多くなった。

(c) 防除指導

- ・適切な種子消毒や育苗期の防除によって、本田への持ち込みを抑える。
- ・長期残効型の箱施薬剤を利用し、発生を確認したら直ちに防除を行う。
- ・曇雨天が多く、葉の湿潤状態が継続する場合は、防除回数を増加する。降雨が続き、地上散布が困難な場合は、早めに粒剤を施用する。
- ・BLASTAM による感染好適日の情報、巡回調査結果を防除所ホームページに掲載した。
- ・葉いもちの発生が多い場合は、出穂期直前と穂揃期の2回防除で穂いもちの発生を抑制する。



b 紋枯病

(a) 発生経過 (発生量：やや多)

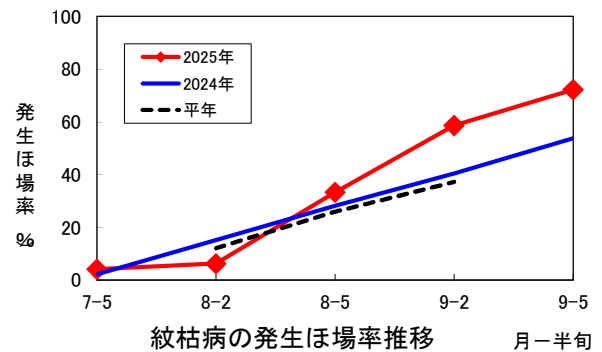
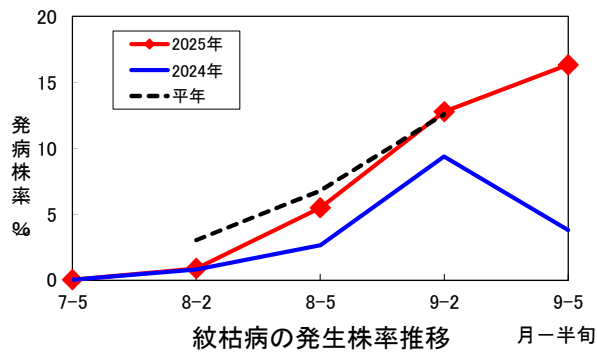
- ・7月5半旬調査で発生が認められ、8月2半旬～9月5半旬にかけて増加し、9月5半旬調査では上位葉へ進展したほ場が多く見られた。

(b) 要因解析

- ・7～9月の気温が高く、8～9月の降水量が多かったため発生が助長された。9月の気温が高く降水量が多かったため、出穂期以降上位葉への進展が多く認められた。
- ・例年発生がするほ場で発病度が高いことから、土壤中に菌核が蓄積している可能性がある。

(c) 防除指導

- ・箱施薬剤による防除、出穂 10～14 日前の本田薬剤防除。
- ・出穂期以降に、高温多雨で経過して病斑の上位進展が認められる場合は、補正防除を行う。
- ・多発田で次年度も水稻作付する場合は、箱施薬剤と本田散布剤を組み合わせた体系防除、適正施肥などの紋枯病対策を徹底する。



c 縞葉枯病

(a) 発生経過 (発生量: -)

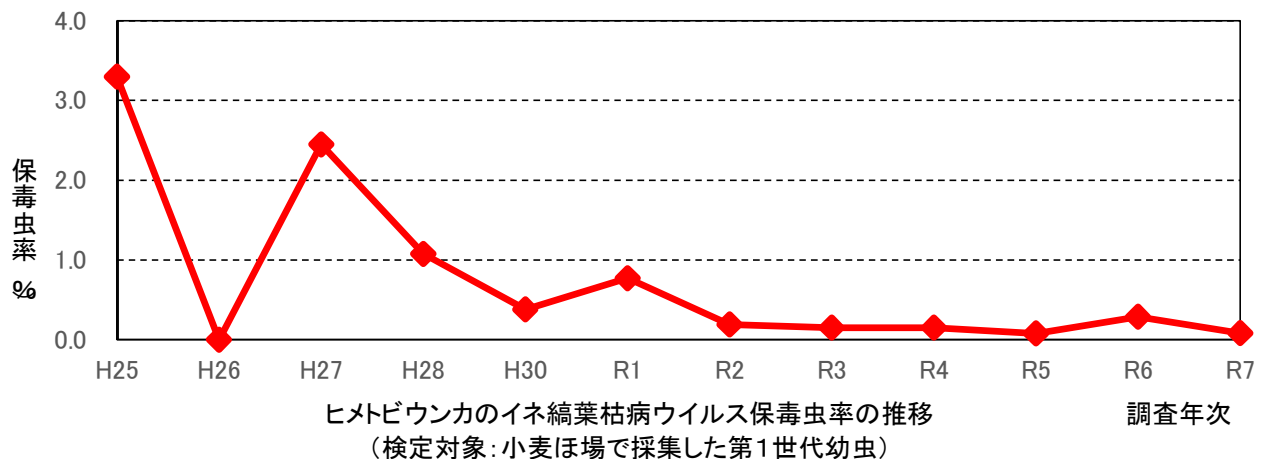
- ・発生は認められなかった。

(b) 要因解析

- ・本病を媒介するヒメトビウンカの保毒虫率が極めて低かったため、発生が抑制された。
- ・ヒメトビウンカに効果が高い箱施薬剤の使用。

(c) 防除指導

- ・冬期のほ場耕起と畦畔雑草防除によるヒメトビウンカの生息密度低減。
- ・箱施薬剤によるヒメトビウンカの防除。



d ヒメトビウンカ

(a) 発生経過 (発生量: 並)

- ・5～9月の予察灯 (県内5か所合計、以下の水稻害虫においても同様) における誘殺数は、61頭 (平均 50.7頭) で、平均並であった。
- ・ほ場では7月2半旬から発生が認められ、平均より少ない発生で推移した。9月5半旬で一部のほ場で多発生した。

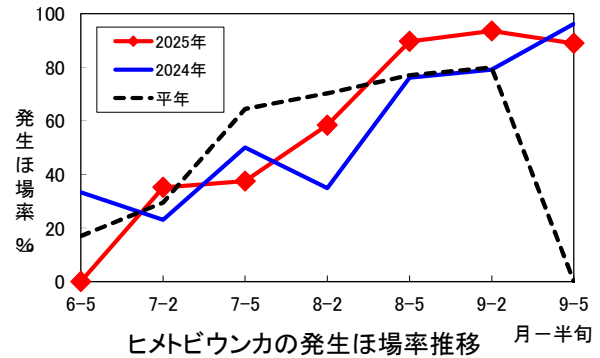
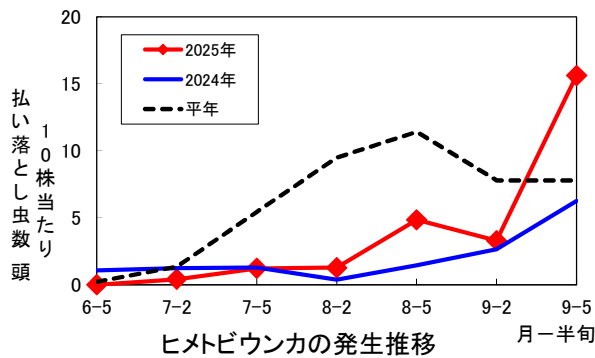
(b) 要因解析

- ・本種に効果の高い箱施薬剤の施用や本田防除の実施によって発生が抑制された。

(c) 防除指導

- ・冬期のほ場耕起と畦畔雑草防除。

- ・箱施薬剤による防除。



e セジロウンカ

(a) 発生経過（発生量：少）

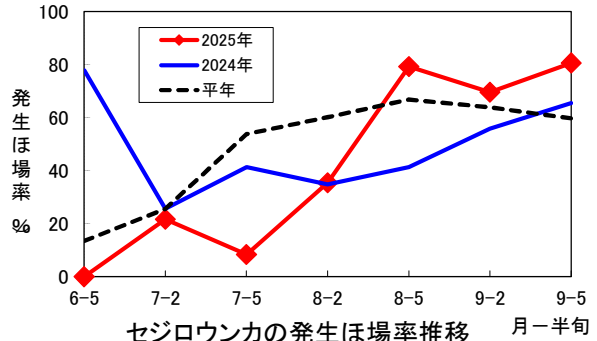
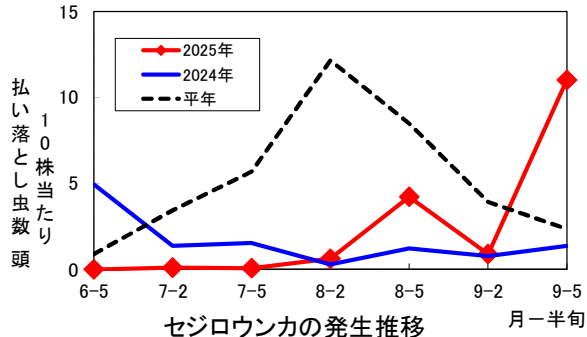
- ・5～8月の予察灯へ誘殺数は、784頭（平均 582.4頭）で平均よりやや多かった。
- ・ほ場では7月2半旬に発生が認められ、平均より少発生で推移した。9月5半旬には一部のほ場で多発生した。

(b) 要因解析

- ・6～8月の飛来量が少なかった。
- ・本種に効果の高い箱施薬剤の施用や本田防除の実施によって発生が抑制された。

(c) 防除指導

- ・幼穂形成期から穂揃期にかけての吸汁加害は、下位茎葉の黄変枯死や出穂遅延、籾数減少の要因となるので、7月5半旬から8月2半旬に幼虫が多発生する場合は薬剤防除を実施する。



f トビイロウンカ

(a) 発生経過（発生量：少）

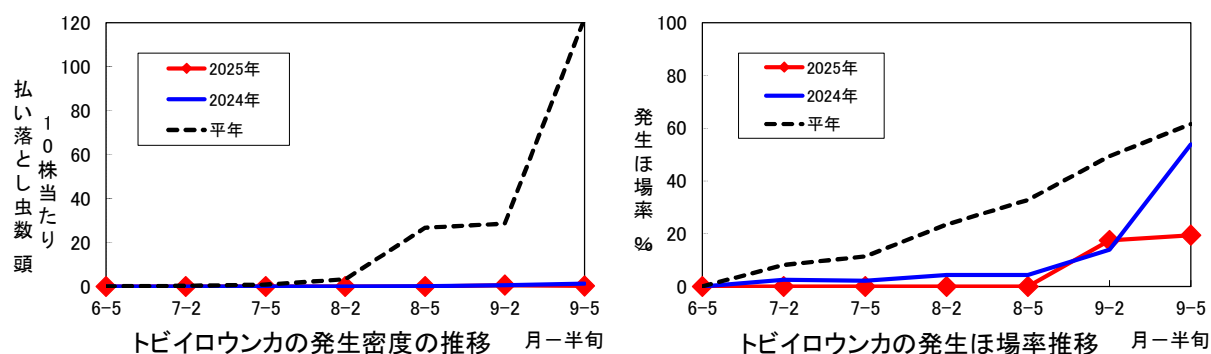
- ・予察灯では8月7日に初誘殺(平均 6月26日)を確認した。梅雨時期の飛来量は少なく、6～8月の誘殺数は平均より少なかった。8月7～10日に複数回飛来を認めた。
- ・ほ場調査では9月2半旬から確認され、発生密度および発生ほ場率は平均より少なかった。

(b) 要因解析

- ・6～8月の飛来量が少なかった。
- ・梅雨時期の飛来に加えて、8月上旬にも飛来を確認した。
- ・本種に効果の高い箱施薬剤の施用や本田防除の実施によって、発生が抑えられた。

(c) 防除指導

- ・飛来に基づく発生予想パターン図を参考に、適期防除を行う。
- ・ほ場での発生状況を確認し、要防除水準を超えた場合は早急に防除を行う。
- ・薬剤が株元まで届くよう散布し、散布後に防除効果を必ず確認する。薬剤散布後も発生が多い場合は、追加防除を行う。



g 斑点米カメムシ（イネカメムシ）

(a) 発生経過（発生量:やや多）

- ・予察灯への誘殺数は2020年以降、増加傾向である。5～9月の誘殺数は本年3,110頭で、前年1,359頭より多かった。
- ・9月2半旬に実施した水稻ほ場における20回すくい取り調査では、発生量は前年よりやや少なかった（本年0.5頭、過去4か年平均1.7頭、前年2.2頭）。発生ほ場率は30.4%（過去4か年平均25.7%、前年31.0%）で、前年並であった。
- ・発生地域は拡大傾向にあり、県南部でも確認された。

イネカメムシの予察灯誘殺成虫数（県内5か所合計）

害虫名	イネカメムシ					
年次	2025	2024	2023	2022	2021	2020
5月	1	3	0	0	0	0
6月	138	7	7	8	0	0
7月	1272	825	282	141	8	0
8月	1081	299	388	96	25	0
9月	618	225	280	169	72	2
年計	3110	1359	957	414	105	2

(b) 要因解析

- ・7～9月の気温が高く推移したため、発生量が多くなった。
- ・早期から普通期の晩生品種まで作期分散して作付けされている地域、無防除田がある地域での発生が多い。また、出穂の時期が極端に早かったり遅かったり、周囲と異なるほ場での発生が多い。
- ・適期防除できた地域では発生が抑制された。

(c) 防除指導

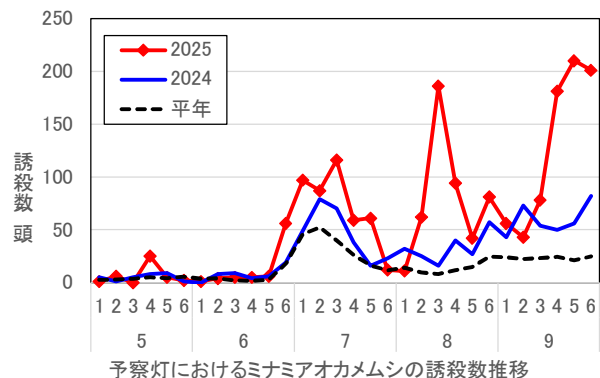
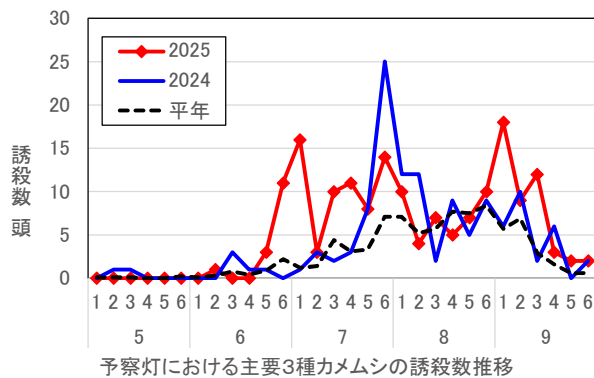
- ・出穂期前後の本田防除および追加防除。
- ・7月22日付発表の注意報で、防除の徹底を呼びかけた。
- ・予察灯の誘殺数や巡回調査結果を防除所ホームページに掲載し、迅速な情報提供に努めた。
- ・発生が多いほ場では、出穂期とその7～14日後の薬剤防除を指導。

h 斑点米カメムシ（ミナミアオカメムシ、主要3種カメムシ類※）

※主要3種カメムシ類：クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシ

(a) 発生経過（発生量:やや多）

- ・主要3種カメムシの予察灯における誘殺数は6月5半旬から増加し、前年よりやや多く前年より多かった（本年166頭 平年85.6頭 前年124頭）。
- ・ミナミアオカメムシの予察灯における誘殺数は、6月5半旬から増加し、平年・前年より多かった（本年1,793頭 平年471.4頭 前年905頭）。



- ・主要3種カメムシ類の水稻ほ場における片振り20回すくい取り調査において、9月2半旬の発生量は平年並であった。
- ・ミナミアオカメムシの水稻ほ場における片振り20回すくい取り調査において、9月2半旬まで平年並・前年並で推移したが、9月2半旬～5半旬にかけて増加し、発生量は前年より多かった。

(b) 要因解析

- ・高温で経過したため、発生量は多かった。
- ・適期防除が行われたほ場では、発生は抑えられた。

(c) 防除指導

- ・穂揃期と穂揃い7～10日後の本田防除。
- ・令和7年7月22日付発表の注意報、定期予報で、防除の徹底を呼びかけた。
- ・予察灯の誘殺数や巡回調査結果を防除所ホームページに掲載し、迅速な情報提供に努めた。

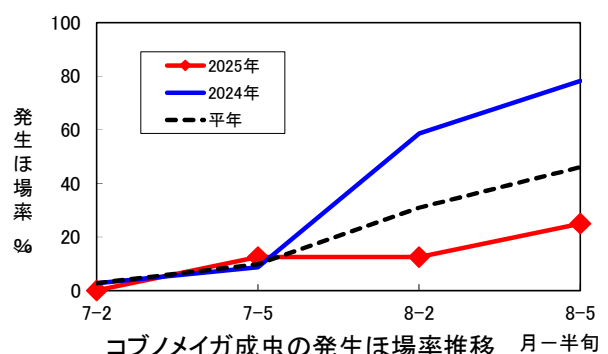
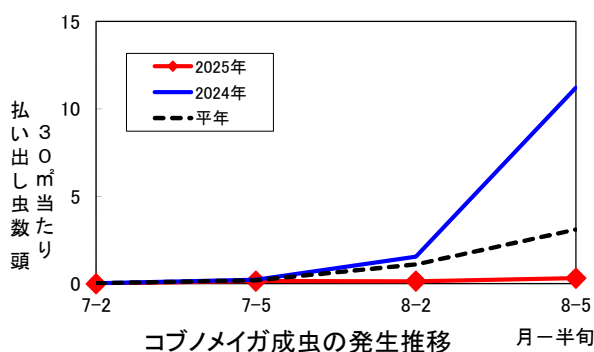
主要3種カメムシ類とミナミアオカメムシの予察灯誘殺成虫数（県内5か所合計）

害虫名	主要3種カメムシ類					ミナミアオカメムシ				
年次	2025	2024	2023	2022	平年	2025	2024	2023	2022	平年
5月	0	2	2	0	0.5	39	29	15	36	23.9
6月	15	5	3	10	4.7	77	46	9	142	32
7月	62	42	42	31	20.5	432	275	85	751	192.2
8月	43	49	54	64	41.6	476	197	38	210	83.3
9月	46	26	42	28	18.3	769	358	131	234	140
年計	166	124	143	133	85.6	1793	905	278	1373	471.4

i コブノメイガ

(a) 発生経過（発生量：少）

- ・ほ場では7月5半旬から認められ、発生密度および発生ほ場率ともに低く推移した。8月5半旬の上位葉への被害株率も低かった。



(b) 要因解析

- ・ 6～8月の飛来量が少なかった。

(c) 防除指導

- ・ 箱施薬剤による防除。
- ・ 本田期の基幹防除。

j その他病害虫

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
心枯線虫病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・ 発生は認められなかった。	・ 種子消毒の徹底。
白葉枯病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・ 発生は認められなかった。	・ 台風等による冠水がなかった。 ・ 基盤整備が進み、中間宿主となる雑草の生息地が減少した。
稲こうじ病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：並	・ 9月5半旬に発生が認められ、発生量は平年よりやや少であった。	・ 8月の気温は高く、降水量は8月2半旬を除いて平年より少なく推移したため、発生量はやや少なかったと考えられる。
心枯線虫病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・ 発生は認められなかった。	・ 種子消毒の徹底。
もみ枯細菌病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：やや少	・ 9月2半旬に発生が認められ、発生量は平年よりやや少であった。	・ 8月の気温は高かったが、降水量は8月2半旬を除き平年より少なく推移したため、発生量はやや少なかったと考えられる。
ばか苗病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・ 発生は認められなかった。	・ 種子消毒の徹底。
ツマグロヨコバイ	平年：やや遅 前年：やや遅	平年：やや少 前年：少	・ 7月5半旬から発生が認められ、平年よりやや少なく推移した。	・ 箱施薬によるウンカ類との同時防除。
イネクロカメムシ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	・ 発生は認められなかった。	・ 本田での補正防除。
イネミズゾウムシ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・ 発生は認められなかった。	・ 箱施薬剤等による防除。
ニカメイガ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	・ 発生は認められなかった。	・ 箱施薬剤等による防除。
フタオビコヤガ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・ 発生は認められなかった。	・ 箱施薬剤等による防除。
スクミリンゴガイ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：少	・ 一部のほ場で食害が認められた。	・ 浅水管理。 ・ 薬剤による補正防除。

(イ) 大麦 (2025年1～5月)

a 赤かび病

(a) 発生経過 (発生量：少)

- ・ 4月5半旬および5月2半旬調査では、発生を認めなかった。

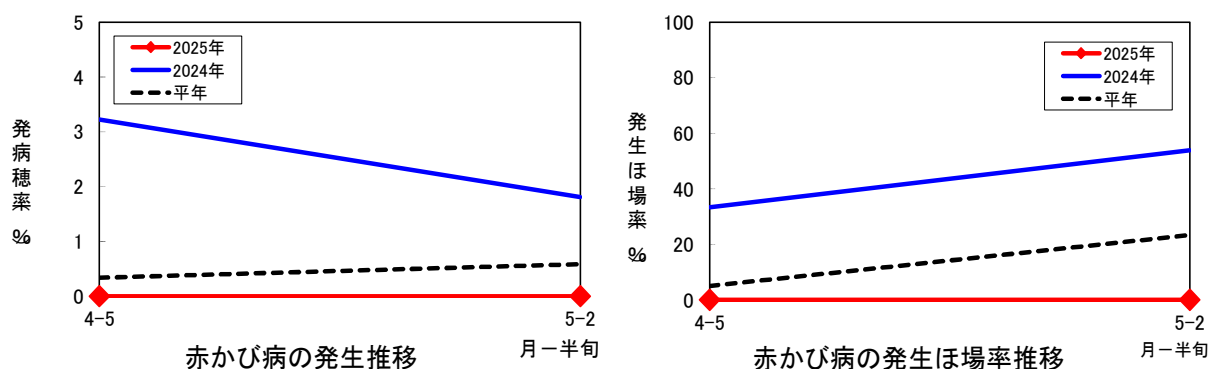
(b) 要因解析

- ・ 4月の気温は平年よりやや高かったが、降水量は平年の43%と少なかった。
- ・ 適期防除が実施された。

(c) 防除指導

- ・ 穂揃期後10日頃に重点をおいて実施する。
- ・ 降雨が続き、多発生が予想される場合には、第一回目散布の7～10日後に補正防除を行う。

- ・令和7年3月28日付の技術情報で、出穂期予想の情報を基に防除の徹底を呼び掛けた。



b 網斑病

(a) 発生経過（発生量：平年並）

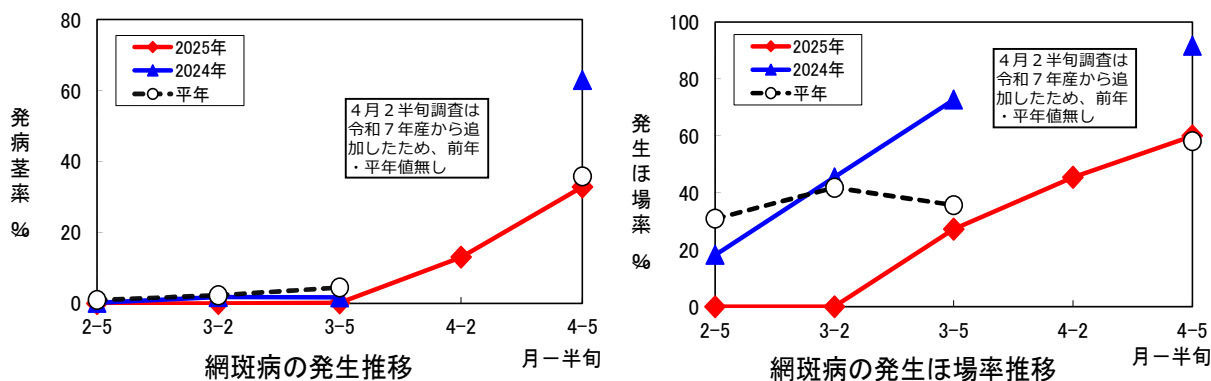
- ・3月5半旬調査で発生が認められ、4月5半旬の発生量は平年並であった。

(b) 要因解析

- ・1～2月の気温が平年よりも低く、降水量も少なく推移した。
- ・3月5半旬から気温が平年より高くなり、降水量は平年よりやや多く推移したため、4月以降に発生が認められた。

(c) 防除指導

- ・健全種子を利用する。トリフルミゾール等による種子消毒の実施。
- ・茎立期に発生を確認し、感染が広がっている場合は、出穂15日前～出穂期までにプロピコナゾール等で補正防除を行う。
- ・第一次伝染源となる被害残さはすき込み、多発生ほ場では2年以上水田に転換する。



c その他病害虫

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
うどんこ病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・耐病性品種の普及。 ・赤かび病対象薬剤による同時防除。
黒穂病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・種子消毒の徹底。
さび病類	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・播種時期が遅れ、1～2月の気温が平年より低く、初期生育が緩慢であった。4月の降水量が平年より少なかったため、発生が抑えられたと考えられる。
縞萎縮病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・耐病性品種が普及したことによって、発生が抑制された。

斑葉病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・種子消毒の徹底。
-----	--------------	--------------	---------------	-----------

(ウ) 小麦 (2025 年 1 ～ 5 月)

a 赤かび病

(a) 発生経過 (発生量：少)

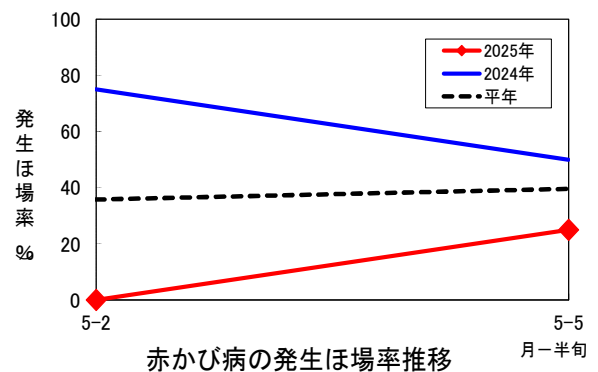
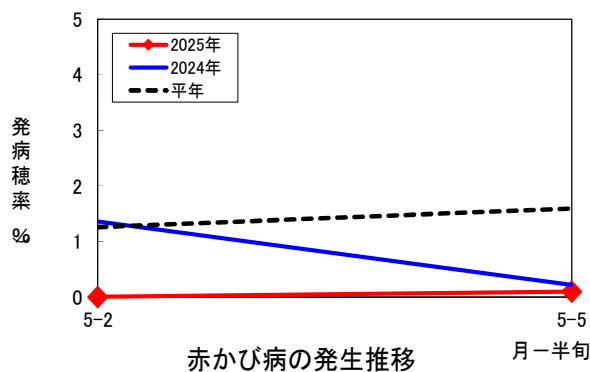
- ・ 5 月 5 半旬調査で発生を認めたが、発生量は平年より少なかった (発生穂率：本年 0.1% 平年 1.6%)。

(b) 要因解析

- ・ 4 月の気温は平年よりやや高かったが、降水量が平年の 43% と少なかった。
- ・ 適期防除が実施された。

(c) 防除指導

- ・ 開花期 (出穂後 7 ～ 10 日) に重点をおいて実施する。
- ・ 降雨が続き、多発生が予想される場合には、第一回目散布の 7 ～ 10 日後に補正防除を行う。
- ・ 令和 7 年 3 月 28 日付の技術情報で、出穂期予想の情報を基に防除の徹底を呼び掛けた。



b 黄斑病

(a) 発生経過 (発生量：並)

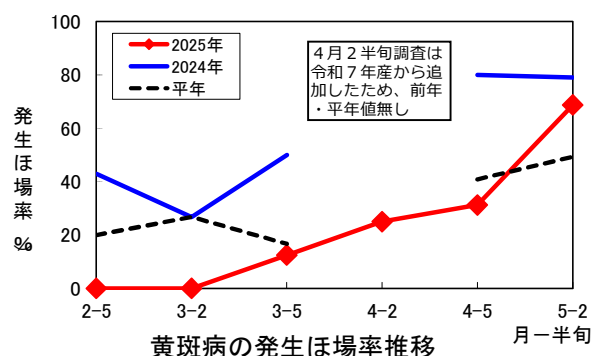
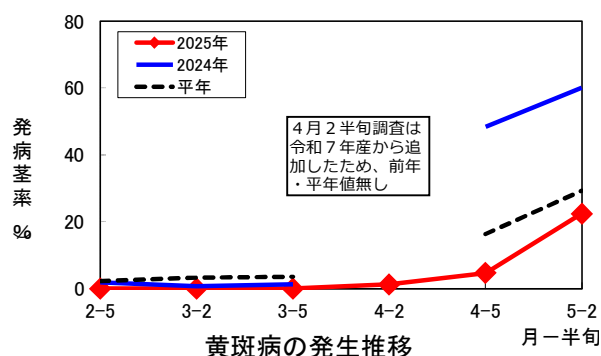
- ・ 3 月 5 半旬調査で発生が認められ、4 月 5 半旬以降は平年並で推移した。

(b) 要因解析

- ・ 播種時期が遅れ、1 ～ 2 月の気温が平年より低かったため、初期生育が緩慢であった。
- ・ 4 月の降水量が平年より少なかったため、発生が抑えられたと考えられる。

(c) 防除指導

- ・ 被害残さは第一次伝染源となるため、ほ場外に持ち出し処分する。
- ・ 大豆との連作を避けて水稲作を組み合わせることで、発病を抑制する。
- ・ 茎立期に発生を確認し、感染が広がっている場合は、出穂期までにプロピコナゾール等で補正防除を行う。



c その他病害虫

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
うどんこ病	平年：並 前年：－	平年：やや少 前年：－	・ 4月5半旬に一部ほ場で発生が認められた。	・ 赤かび病対象薬剤による同時防除。
黒穂病	平年：やや遅 前年：－	平年：並 前年：やや多	・ 5月2半旬に一部ほ場で発生が認められた。	・ 種子消毒の徹底。
さび病類	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・ 発生は認められなかった。	・ 4月の降水量が平年より少なかったため、発生が抑えられたと考えられる。
縞萎縮病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・ 発生は認められなかった。	・ 耐病性品種が普及したことによって、発生が抑制された。
シロトビムシ類	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・ 発生は認められなかった。	・ 種子消毒の実施や適期播種によって被害が少なくなった。

(エ) 大豆 (2025年7～10月)

a ハスモンヨトウ

(a) 発生経過 (発生量：やや少)

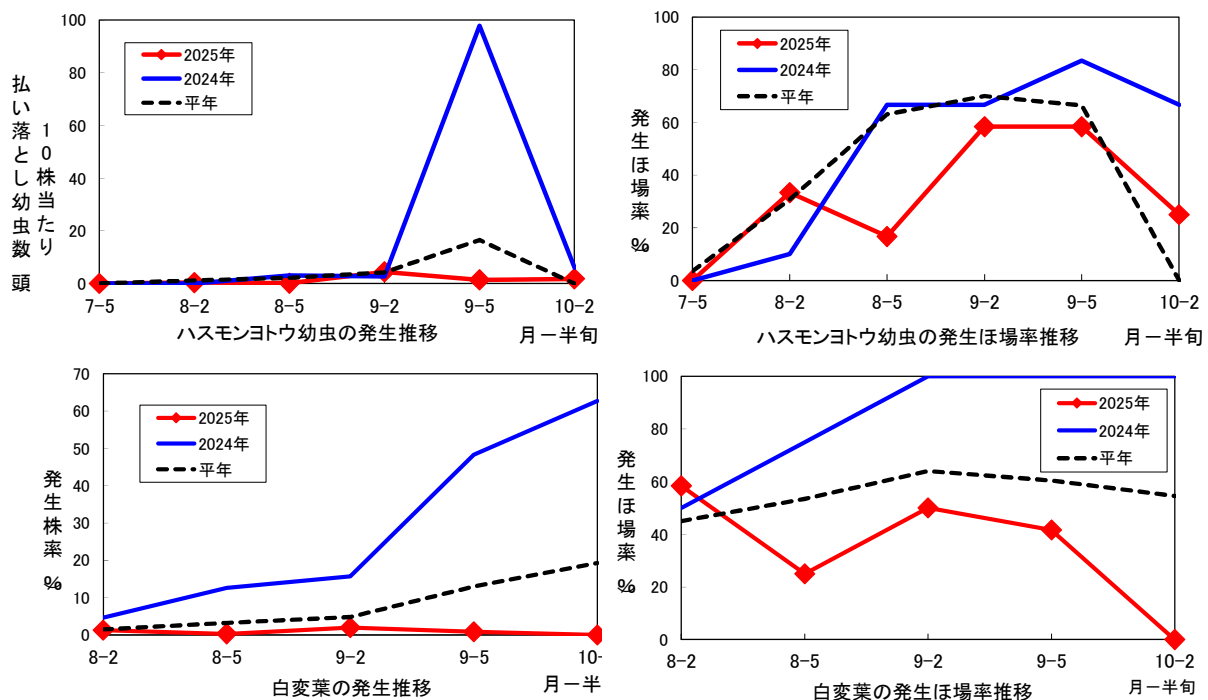
- ・ 6～9月のフェロモントラップにおける誘殺数は、おおむね平年よりやや少なく推移した。
- ・ 大豆ほ場における叩き落とし調査の結果、幼虫の発生量は平年よりやや少なく推移した。白変葉の発生も少なかった。

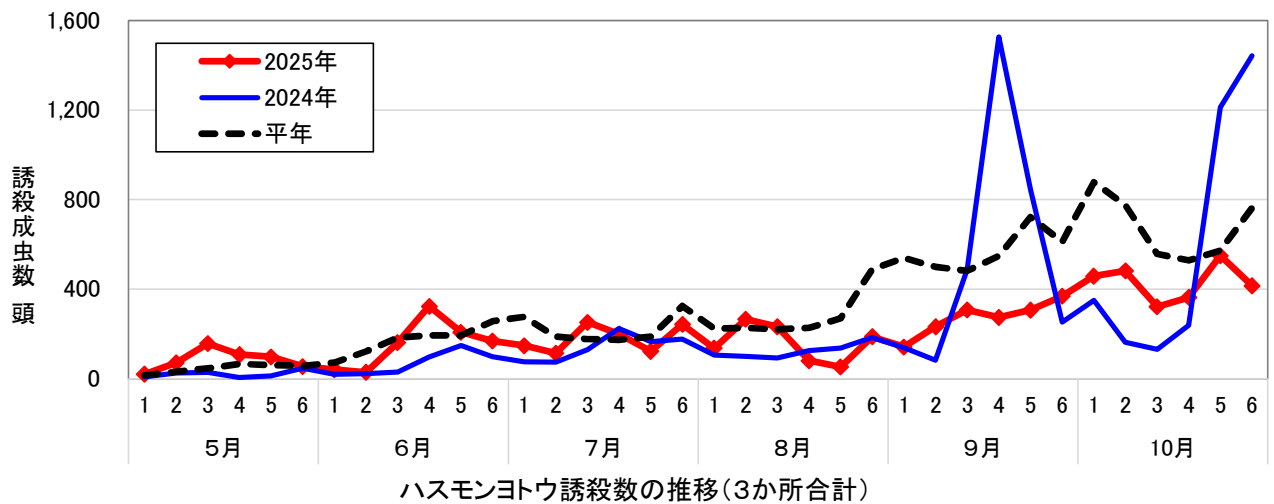
(b) 要因解析

- ・ フェロモントラップへの誘殺数はやや少なかった。
- ・ 8～9月に降雨日や大雨が多かったため、発生が抑制された。
- ・ 防除効果の高い薬剤による防除。

(c) 防除指導

- ・ 白変葉は見つけ次第除去する。
- ・ 若齢幼虫期の防除。
- ・ フェロモントラップを活用した防除適期の把握。
- ・ 同一系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布の徹底。
- ・ フェロモントラップへの誘殺数、巡回調査結果を防除所ホームページに掲載し、迅速な情報提供に努め、定期予報で適期防除を呼び掛けた。





b 吸実性カメムシ類

(a) 発生経過 (発生量：多)

- ・ミナミアオカメムシの5～9月の予察灯への誘殺数(県内5か所合計)は平年より多かった。
- ・ほ場で発生量は、ミナミアオカメムシがやや多く、ホソヘリカメムシ、イチモンジカメムシは多かった。特に9月以降、大きく増加した。

(b) 要因解析

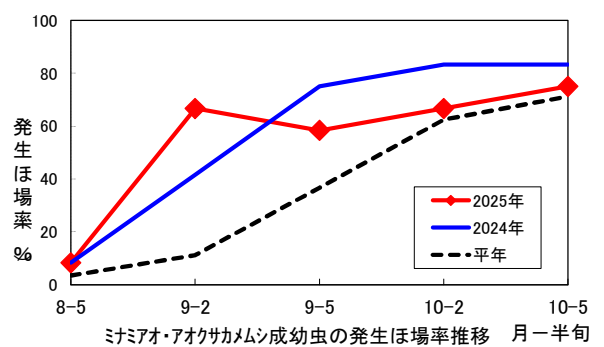
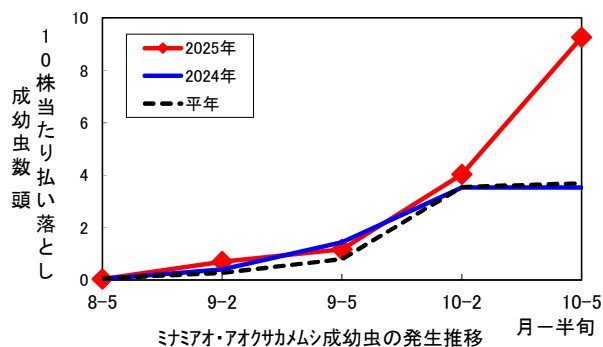
- ・8～10月の気温は平年より高く、8月2半旬、9月3半旬を除いて少雨傾向で推移した。
- ・適期に基幹防除が実施され、発生を抑えることができた。

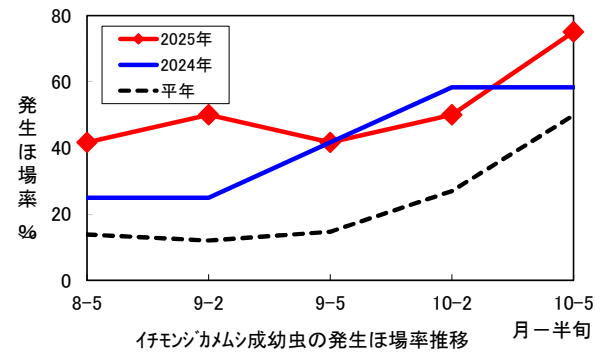
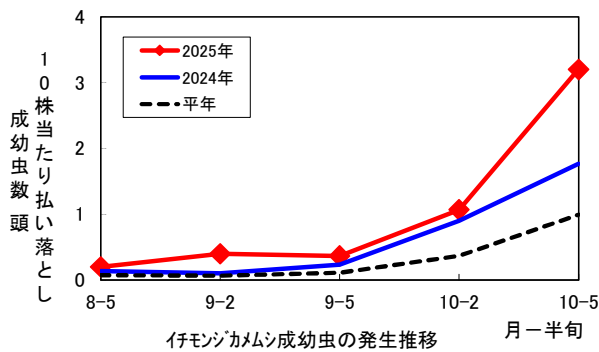
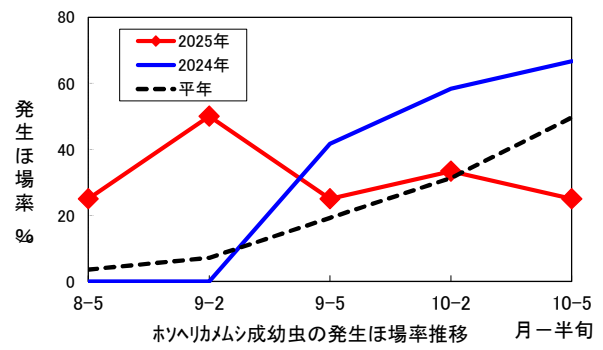
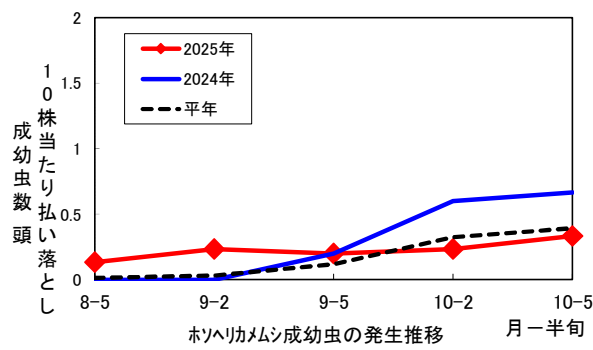
(c) 除指指導

- ・開花期後30日前後に1回目の防除を行う。
- ・多発生の場合は、その後7～10日後に2回目の防除を行う。

ミナミアオカメムシの予察灯誘殺成虫数(県内5か所合計)

害虫名	ミナミアオカメムシ				
年次	2025	2024	2023	2022	平年
5月	39	29	15	36	23.9
6月	77	46	9	142	32
7月	432	275	85	751	192.2
8月	476	197	38	210	83.3
9月	769	358	131	234	140
年計	1793	905	278	1373	471.4





c その他病害虫

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
さび病	平年：並 前年：並	平年：少 前年：やや少	・ 9月2半旬に一部地域で発生が認められたが、発生量は平年より少なかった。	・ 8～10月の降水量は8月2半旬、9月3半旬を除いて少雨傾向で推移した。台風の接近や風雨が少なかったため、発生が少なかった。
葉焼病	平年：やや遅 前年：並	平年：やや少 前年：並	・ 9月2半旬に発生が認められ、発生量は平年よりやや少なかった。	・ 台風の接近や風雨が少なかったため、発生がやや少なかった。
べと病	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：多	・ 9月2半旬に発生が認められ、発生量は平年よりやや多くなった。	・ 8～9月の気温が高く、降水量がやや多かったため、発生が助長された。
紫斑病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：少	・ 収穫物調査の結果、前年より発生は少なかった。	・ 9月下旬～11月上旬の降水量が少なかったため、発生が前年より少なかった。
フタスジヒメハムシ	平年：やや遅 前年：並	平年：並 前年：少	・ 8月5半旬に発生が認められ、平年並であった。	・ 8～10月の気温は平年より高く推移し、8月2半旬、9月3半旬を除いて少雨傾向で推移した。
アブラムシ類	平年：やや遅 前年：－	平年：並 前年：－	・ 8月5半旬に発生が認められ、平年並であった。	・ カメムシ類対象薬剤による同時防除。

イ 果樹

(ア) かんきつ (2025年3～10月)

a 黒点病

(a) 発生経過 (発生量：やや少)

- ・ 6～8月の発病果率は平年並であったが、以降はやや少ない発生となった。10月調査で

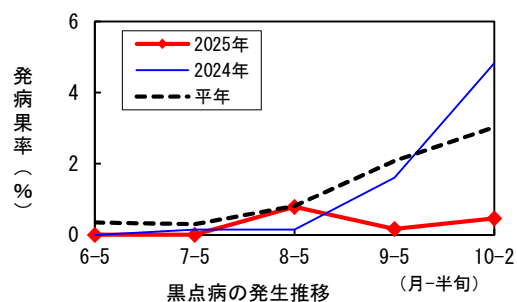
は、一部は場で多発生が確認された。

(b) 要因解析

- ・前年作での発生量は平年並であった。
- ・夏季の少雨傾向、防除の徹底によって発生が抑えられた。

(c) 防除指導

- ・定期予報で発生状況を周知し、適期防除を指導。



b ミカンハダニ

(a) 発生経過 (発生量：やや少)

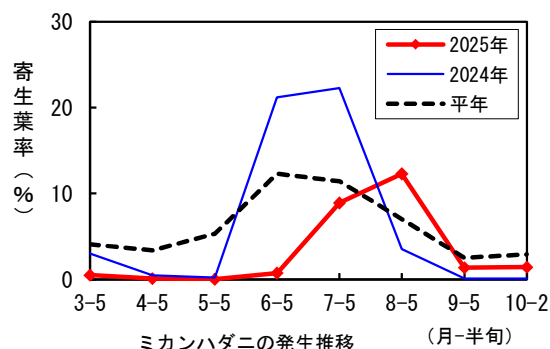
- ・8月の発生は多かったが、他の時期の発生は抑えられた。

(b) 要因解析

- ・前年作以降、ほ場での密度は低かったと考えられる。
- ・定期防除や、定期的な強雨の影響で、発生はやや少なく推移した。

(c) 防除指導

- ・定期予報で発生状況を周知し、適期防除を指導。
- ・薬剤感受性低下を避けるため、マシン油の活用や薬剤のローテーション散布を指導。



c その他の病害虫

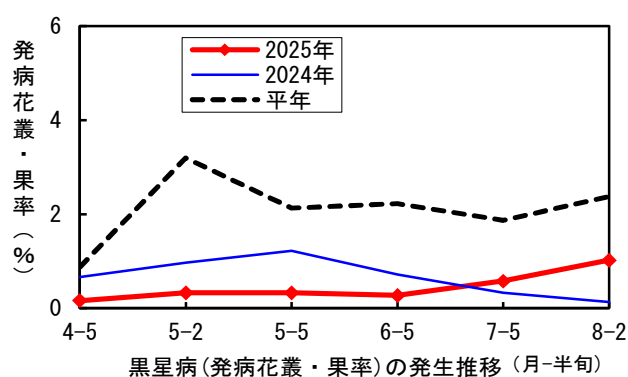
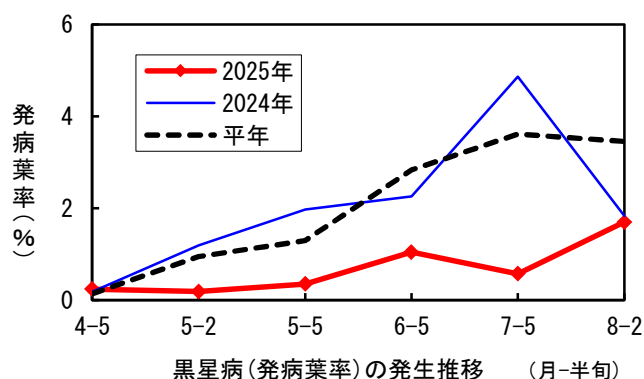
病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
そうか病	平年：並 前年：やや遅	平年：並 前年：並	・葉や果実での発生は一部は場で認められた。発生量は平年並であった。	・適期に防除が実施された。
かいよう病	平年：並 前年：並	平年：やや少 前年：並	・葉、果実ともに発生量は平年より少なかった。	・適期に防除が実施された。 ・6～7月は少雨傾向であった
アブラムシ類	平年：遅 前年：遅	平年：少 前年：少	・発生ほ場率・寄生葉率は少なく推移した。	・適期に防除が実施された。

(イ) なし (2025年4～8月)

a 黒星病

(a) 発生推移 (発生量：やや少)

- ・葉での発生は、5月から収穫終了までやや少なかった。
- ・果実での発生は、4月下旬から一部は場で認められ、以降は平年よりやや少なかった。



(b) 原因の解析

- ・前年作でのほ場の菌密度は低かった。
- ・摘果作業が徹底され、適期防除が行われた。

(c) 防除指導

- ・適期防除、罹病葉や罹病果の除去、感受性低下を避けるための薬剤のローテーション散布、DMI 剤等の使用回数制限などを、定期予報で指導。

b ハダニ類

(a) 発生経過（発生量：やや少）

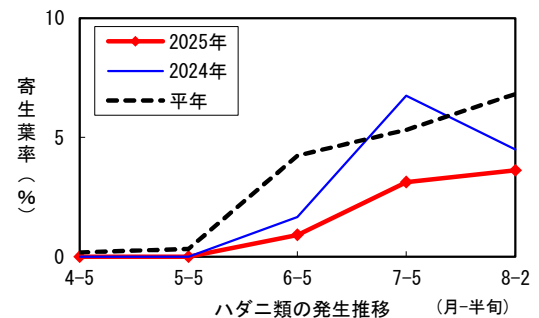
- ・寄生葉率は平年よりやや少なかった。

(b) 要因解析

- ・前年作での防除が徹底され、越冬虫が少なかった。
- ・防除が徹底された。
- ・5～6月が多雨傾向であった。

(c) 防除指導

- ・定期予報で発生状況を周知し、適期防除を指導。
- ・薬剤感受性低下を避けるため、薬剤のローテーション散布を指導。



c その他の病害虫

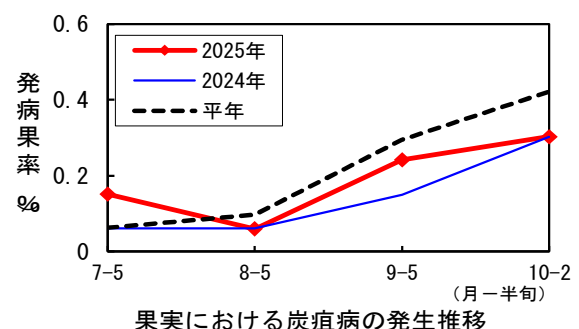
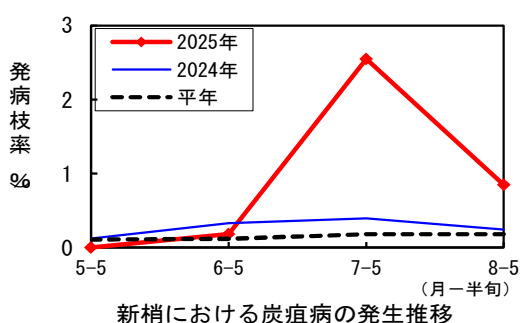
病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
赤星病	平年：並 前年：並	平年：少 前年：並	・発生量は平年より少なく前年並であった。	・適期に防除が実施された。 ・各産地のビャクシンの赤星病寄生率は年々低下していると考えられる。
黒斑病	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	・発生は少なく、被害は軽微であった。	・県の主力品種である「幸水」、「豊水」は本病に対し抵抗性を有する。
ナシヒメシクイ	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	・フェロモントラップへの誘殺数はおおむね平年よりやや多かった。	・適期に防除が実施された。
カメムシ類	平年：並 前年：並	平年：やや少 前年：やや少	・予察灯捕殺数は8月以降増加し、果実への被害が局地的に発生した。	・越冬世代成虫が少なく、4～8月の発生は少なかった。
アブラムシ類	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	・発生は平年並の4月上旬から認められ、以降おおむね平年並に推移した。	・防除適期に他の害虫と同時防除されたと考えられる。
モモシクイガ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・フェロモントラップへの誘殺数は平年並であった。	・一部ほ場で適期防除ができなかった。
ハマキムシ類	平年：やや早 前年：並	平年：並 前年：並	・被害は平年同様に軽微であった。	・発生消長が例年とやや異なった。

(ウ) かき（2025年4～10月）

a 炭疽病

(a) 発生経過（発生量：並）

- ・枝では、一部園で多発生した。果実では平年並で推移した。



(b) 要因解析

- ・6月の高温多雨により一部園で多発生したが、以降の少雨傾向や防除によって果実への感染拡大が抑えられたと考えられる。
- ・日焼け果と併発した罹病果が散見された。

(c) 防除指導

- ・定期予報で、罹病枝と罹病果の適切な除去および処分、定期防除の徹底などを指導。

b フジコナカイガラムシ

(a) 発生経過（発生量：やや少）

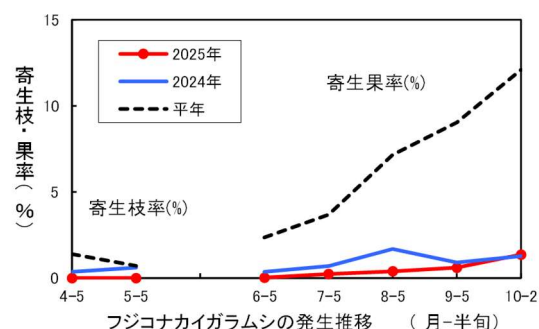
- ・寄生枝率、寄生果率ともに平年より低く推移した。

(b) 要因解析

- ・前年作での寄生果率が低かったため、越冬世代の寄生枝率は平年より低く推移した。

(c) 防除指導

- ・定期予報で、散布ムラのない丁寧な散布、天敵に配慮した薬剤の選択などを指導。



c その他の病害虫

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
カキノヘタムシガ	平年：やや早 前年：やや早	平年：並 前年：やや多	・9月5半旬はやや多く発生が認められたが、おおむね平年並の発生であった。	・発生消長が例年とやや異なった。 ・適期に防除が実施された。
カメムシ類	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：やや少	・後述の果樹カメムシ類の項を参照	・後述の果樹カメムシ類の項を参照。
ハマキムシ類	平年：やや早 前年：やや早	平年：やや多 前年：やや多	・フェロモントラップへの誘殺は、平年同様に4月上旬から認められた ・果実での被害は6月下旬から認められ、被害量はやや多く推移した。	・発生消長が例年とやや異なった。

(エ) ぶどう（2025年4～8月） 注）2023年からの調査で平年値が無い場合、2024年、2023年比を記載。

a ベと病

(a) 発生経過（発生量：並）

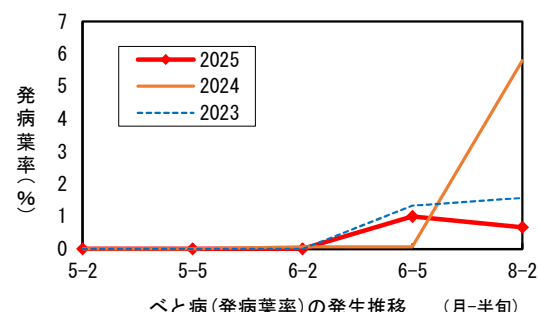
- ・葉では、発生開始時期はやや遅く、2023年並の発生であった。

(b) 要因解析

- ・6月の高温多雨の影響で一部園にて発生したが、以降の少雨傾向で、感染拡大が抑えられたと考えられる。

(c) 防除指導

- ・定期予報で、罹病枝と罹病果の除去および処分、定期防除の徹底などを指導。
- ・雨媒伝染をするため、発生の多い園では、風雨前の防除を徹底。



b その他の病害虫

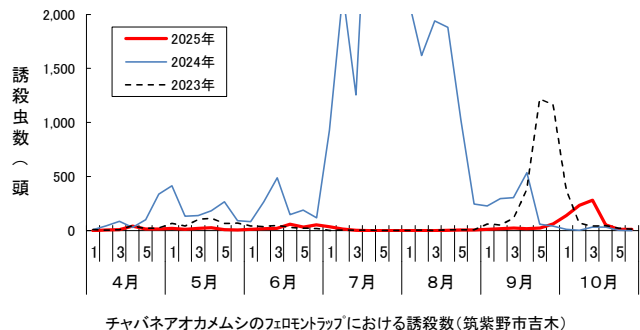
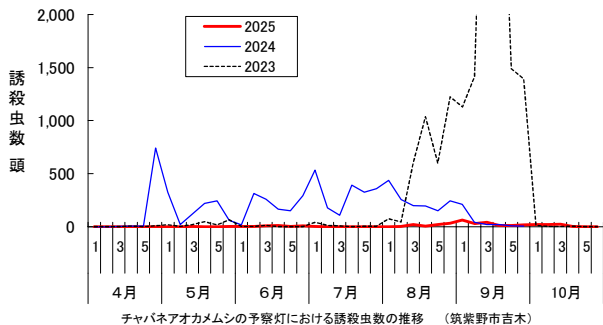
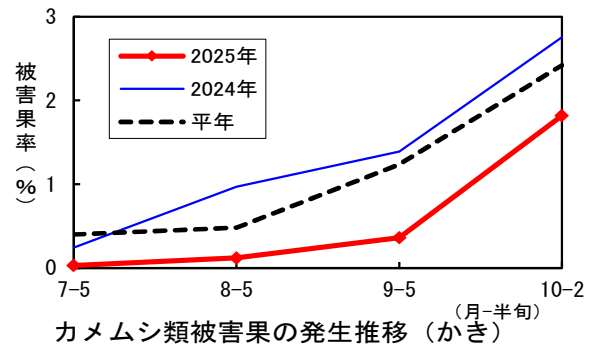
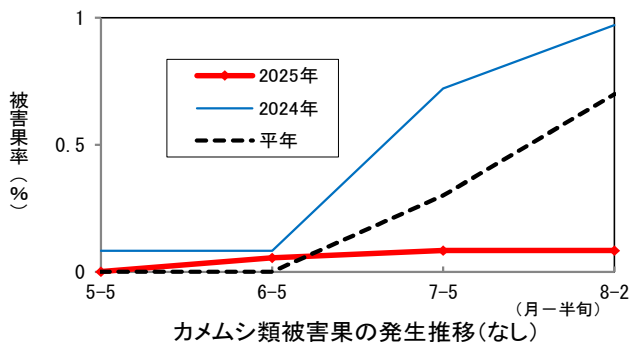
病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
灰色かび病	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	・一部ほ場でやや多く発生が認められたが、おおむね平年並の発生であった。	・適期に防除が実施された。

晩腐病	平年：やや遅 前年：やや遅	平年：やや少 前年：やや少	・調査期間の発生は軽微であった。	・袋掛時期以降も少雨傾向であった。
チャノキイロアザミウマ	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	・果実での被害量はおおむね平年並に推移した。	・適期に防除が実施された。

(オ) 果樹カメムシ類 2025 年 4～10 月) (主として、チャバネアオカメムシ)

(a) 発生経過 (発生量：4～7 月 - 平年・前年より少 8～10 月 - 平年・前年並)

- ・越冬虫数が少なかったため、予察灯やフェロモントラップへの誘殺数は、前期(4 月～8 月 3 半旬)は前年より少なく、後期(8 月 4 半旬～10 月)は増加したもののやや少～平年並であった。
- ・果樹園への飛来量と加害程度は必ずしも一致せず、加害は偶発的かつ局所的となる傾向があった。
- ・なしの被害果率は、収穫直前まで低く推移した。
- ・かきの被害果率は、収穫直前まで低く推移したが、局地的に多発生したほ場があった。



(b) 要因解析

- ・越冬量は過去 10 年間で最も少なく、春以降の動き出しは遅かった。
- ・ヒノキ球果の着生量はやや少～中程度であった。
- ・口針鞘数は 7 月 5 半旬の調査開始から少なく推移し、9 月 5 半旬までにヒノキからの離脱目安である 25 本/果に達しなかった。
- ・ビーティングで確認された成虫数は、7～8 月は少なく、9 月は平年並であった。球果の採取時に気温を測定したところ、多くの地点が 30℃以上であり、一部では 35℃を超えていた。このことから、成虫が高温を避けて活動した結果、ビーティング地点では確認できなかった可能性がある。
- ・近年、盛夏期には果樹カメムシ類の活動が鈍るとされる 30 度以上の気温が常態化しており、カメムシ類の生態とその予察手法に乖離が生じている恐れがある。

(c) 防除指導

- ・誘殺消長の推移をホームページへ随時掲載した。さらに 2 月 4 日、7 月 31 日、9 月 19 日付で技術情報を適宜発表して、適期防除を呼びかけた。

(カ) キウイフルーツ (2025 年 3 ～ 6 月)

a キウイフルーツかいよう病

(a) 発生経過

- ・発病が疑われる樹体や葉は、前年よりも少なかった。持ち込まれた検体においても、陽性検出数は前年より少なかった。

(b) 要因解析

- ・2024 年 12 月から 2025 年 2 月の気温は、黒木アメダスで平年より約 2℃低くなるなど、近年の暖冬傾向と異なり、おおむね低温傾向であった。時折温暖な日もあったが、前年のような樹体が傷むほどの急激な冷え込みはなかった。このため、樹の傷みによる感染の拡大が抑制されたと考えられる。

(c) 防除指導

- ・技術情報で、発芽前からの銅剤による予防散布、園内巡回による罹病部位の切除、健全な花粉の利用、せん定鋏などによる人為的感染の防止などを指導した。
- ・新規に発生した園を特定するために、PCR による検定を実施した。
- ・県域の生産会議などにおいて、上記の検定結果を示して注意喚起した。

ウ 野菜

(ア) 冬春イチゴ (2024 年 6 月～2025 年 4 月)

a 灰色かび病

(a) 発生経過 (発生量：平年並)

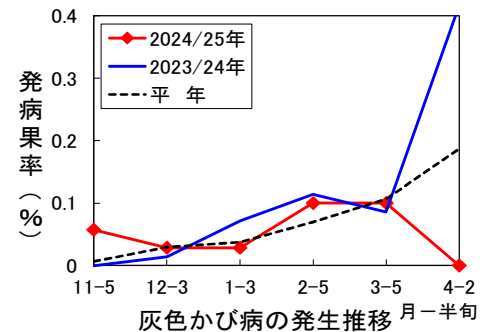
- ・発生は 11 月から認められた。3 月まで平年並で推移し、4 月は少発生となった。

(b) 要因解析

- ・管理作業の徹底による伝染源の除去。

(c) 防除指導

- ・定期予報で、発病果の除去、換気などを指導した。



b うどんこ病

(a) 発生経過 (発生量：育苗ほ…平年並、本ほ…平年よりやや少)

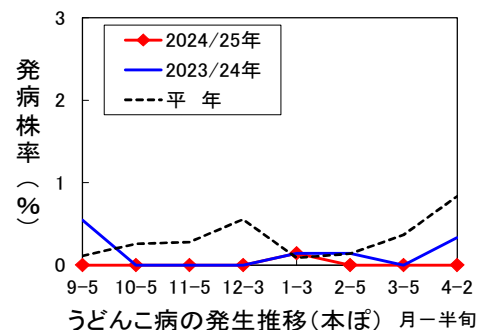
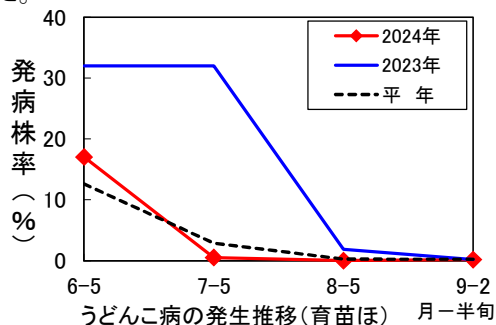
- ・【育苗ほ】平年並で推移した。
- ・【本ほ】平年よりやや少なく推移した。

(b) 要因解析

- ・【育苗ほ】育苗中の高温による菌密度の低下。
- ・【本ほ】防除の徹底。

(c) 防除指導

- ・定期予報で、発病葉の除去、異なる系統の薬剤によるローテーション散布などを指導した。



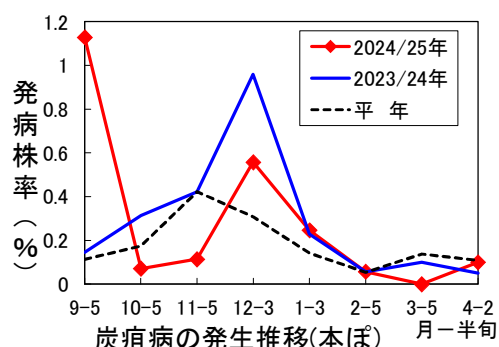
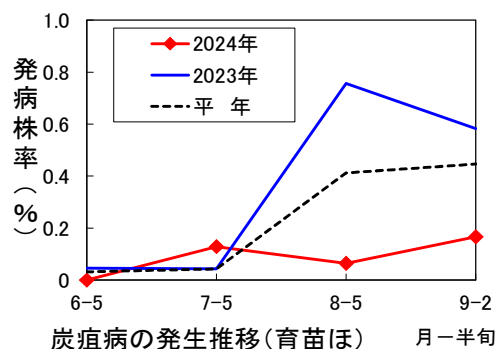
c 炭疽病

(a) 発生経過 (発生量：育苗ほ…平年よりやや少、本ほ…平年よりやや多)

- ・【育苗ほ】7 月に平年を上回る発生が認められたが、8 月以降は平年より少なく推移し、

全体として平年よりやや少ない発生量となった。

- ・【本ぼ】9月、12月に多発生し、その後4月まで平年並に推移した。全体としては平年よりやや多い発生量となった。



(b) 要因解析

- ・【育苗ほ】暖冬による発生の早期化。薬剤防除、発病株の除去の徹底。
- ・【本ぼ】9～11月の高温によって菌密度が増加。薬剤感受性の低下による感染拡大。

(c) 防除指導

- ・定期予報で、発病株や周辺株の抜き取り、密植を避けるなどの指導を行った。
- ・令和7年1月23日付け技術情報で、親株の炭疽病潜在感染状況を周知し、防除を徹底するよう注意喚起した。

d ハダニ類

(a) 発生経過（発生量：育苗ほ…平年並、本ぼ…平年並）

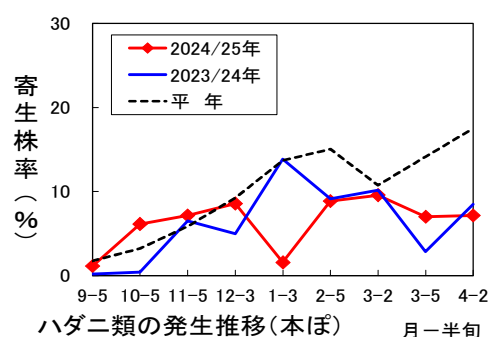
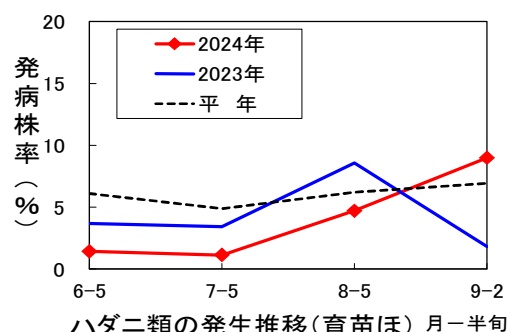
- ・【育苗ほ】6月から発生が認められ、9月には一部のは場で平年を上回る発生となったが、おおむね平年並に推移した。
- ・【本ぼ】発生は9月から認められ、1月に寄生株率は低下した。おおむね平年並に推移した。

(b) 要因解析

- ・【育苗ほ】8～9月の高温および初期防除の遅れによって一部は場で多発生した。
- ・【本ぼ】育苗ほからの持ち込みによる発生が認められ、一部は場では初期防除の遅れによって多発生した。天敵利用および薬剤防除の徹底によって、密度は低下した。

(c) 防除指導

- ・定期予報で、除草や発生初期の防除、天敵の利用などについて指導した。
- ・高温少雨の発生好適気象条件であったことから、多発生が予想されたため、定期予報で防除を徹底するよう注意喚起した。



e その他の病害虫

	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
	萎黄病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・健全な親株からの採苗。 ・防除の徹底。

育苗ほ	アブラムシ類	平年：並 前年：並	平年：やや少 前年：並	・一部ほ場で8月に多発生したが、全体として平年よりやや少なく推移した。	・防除の徹底。
	オオタバコガ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・防除の徹底。
	ハスモンヨトウ	平年：遅 前年：並	平年：やや少 前年：やや少	・一部ほ場で8月に発生が認められたが、全体として平年よりやや少なく推移した。	・防除の徹底。
	シロイチモジヨトウ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・防除の徹底。
	チョウ目害虫被害	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：並	・6月から発生が認められ、全体として平年よりやや多かった。	・期間を通した高温傾向。
	コナジラミ類	平年：－ 前年：遅	平年：－ 前年：並	・一部ほ場で6月に多発生したが、その後発生量は減少した。	・期間を通した高温傾向。 ・防除の徹底。
本ほ	萎黄病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・防除の徹底。
	菌核病	平年：並 前年：－	平年：並 前年：－	・2～3月に一部ほ場で発生が認められたが、その後発生は確認されなかった。	・防除の徹底。
	アブラムシ類	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	・9月から発生が認められ、全体としては平年並で推移した。	・防除の徹底。
	アザミウマ類	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	・11月から発生が認められた。1月に多発生したが、2月以降は全体として平年より少なく推移した。	・防除の徹底。 ・1～2月の気温の低下。
	ハスモンヨトウ	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：やや少	・9月から発生が認められ、10月に多発生したが、その後は平年並で推移した。	・9～10月の高温。 ・薬剤感受性低下。
	オオタバコガ	平年：やや遅 前年：並	平年：並 前年：並	・一部ほ場で10～11月に発生が認められたが、その後発生は確認されなかった。	・防除の徹底。
	シロイチモジヨトウ	平年：－ 前年：やや遅	平年：－ 前年：並	・一部ほ場で11月に発生が認められた。	・防除の徹底。
	チョウ目害虫被害	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：多	・9月に発生が認められ、平年よりやや多く推移した。	・9～10月の高温、少雨。 ・防除の不徹底。 ・薬剤感受性低下。
	コナジラミ類	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	・9月から発生が認められ、11月に多発生したが、12月以降は平年並で推移した。	・防除の不徹底。 ・薬剤感受性低下。

(イ) 冬春トマト¹⁾ (2024年10月～2025年4月) 注

1) 2022年からの調査で平年値が無いため、前年比のみ記載。

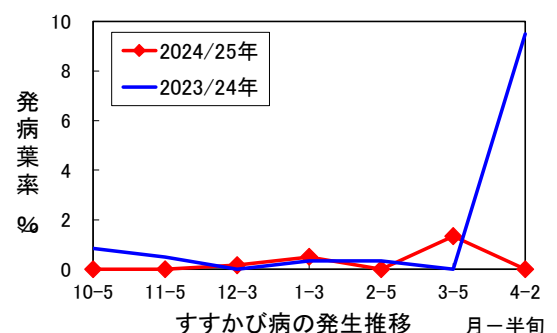
a すずかび病

(a) 発生経過 (発生量：前年並)

- ・発生は1月および3月に認められ、発生量は前年並であった。

(b) 要因解析

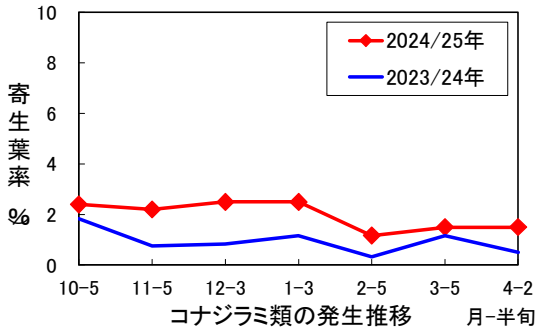
- ・防除の徹底。
- ・12月、1月の十分な日照によるハウス内環境の低湿化。



- (c) 防除指導
 - ・定期予報で、発病葉の除去や換気などを指導した。

b コナジラミ類

- (a) 発生経過（発生量：前年よりやや多）
 - ・発生は10月から認められ、全体として前年よりやや多かった。
- (b) 要因解析
 - ・期間を通した高温傾向。
 - ・ハウスの隙間や開口部からの侵入。
 - ・ハウス周辺の植物残渣や雑草への寄生、増殖。
 - ・薬剤感受性の低下。



- (c) 防除指導
 - ・定期予報で、ほ場周辺の雑草防除の徹底や防虫ネットの目合いなどを指導した。

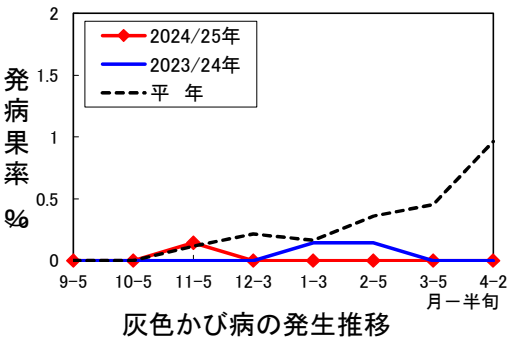
c その他の病害虫

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
疫病	前年：－	前年：－	・発生は認められなかった。	・防除の徹底。
灰色かび病	前年：早	前年：少	・12月から発生が認められ、3月以降多発生した前年と比べ少発生で推移した。	・防除の徹底。
葉かび病	前年：－	前年：やや多	・11月に一部ほ場で発生が認められたが、その後発生は確認されなかった。	・防除の徹底。 ・耐病性品種の普及。
黄化葉巻病	前年：早	前年：やや多	・12月以降発生が認められ、1月に多発生した。	・耐病性品種導入ほ場での発病株除去の不徹底。 ・コナジラミの薬剤感受性低下。
アブラムシ類	前年：－	前年：－	・発生は認められなかった。	・防除の徹底。
ハモグリバエ類	前年：－	前年：やや多	・12月～1月、3月に一部ほ場で発生した。	・防除の不徹底。

(ウ) 冬春ナス（2024年9月～2025年4月）

a 灰色かび病

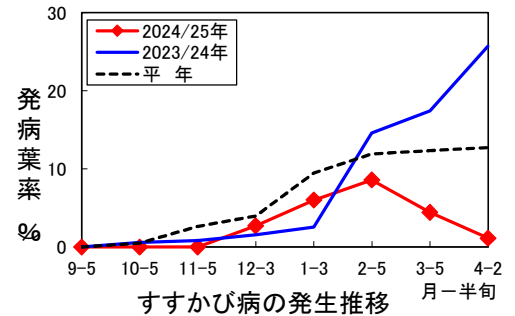
- (a) 発生経過（発生量：平年より少）
 - ・11月に発生が認められたが、その後発生は確認されなかった。
- (b) 要因解析
 - ・発病葉、発病果の摘除および適期防除の徹底。
 - ・12月、1月の十分な日照によるハウス内環境が低湿化し、発生抑制された。
- (c) 防除指導
 - ・定期予報で、ハウスの換気、薬剤散布などを指導した。



b すすかび病

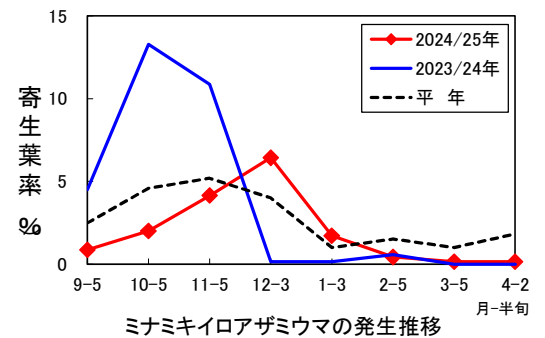
- (a) 発生経過（発生量：平年よりやや少）
 - ・12月から発生が認められたが、平年よりやや少なく推移した。
- (b) 要因解析
 - ・着果負担による樹勢低下。

- ・防除の徹底。
 - ・12月、1月の十分な日照によってハウス内環境が低湿化し、発生抑制された。
- (c) 防除指導
- ・定期予報で、適正な肥培管理、初期防除の徹底を指導した。



c ミナミキイロアザミウマ

- (a) 発生経過（発生量：平年並）
- ・9月から発生が認められ、11～12月にかけて一部のほ場で多発生した。その後の発生は少なく、全体として平年並の発生量であった。
- (b) 要因解析
- ・初期防除の不徹底。
 - ・天敵であるタバコカスミカメの増殖によって密度が抑制された。
- (c) 防除指導
- ・定期予報で、初期防除の徹底、天敵利用時の注意点について指導した。



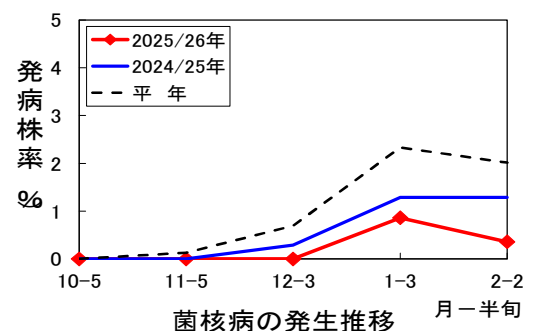
d その他の病害虫

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
うどんこ病	平年：遅 前年：並	平年：並 前年：やや多	・11月から発生が認められ、3月に多発生したが、おおむね平年並で推移した。	・防除の不徹底。
ハダニ類	平年：並 前年：早	平年：並 前年：並	・9月から一部のほ場で発生したが、平年並で推移した。	・防除の不徹底。
アブラムシ類	平年：並 前年：早	平年：並 前年：並	・9月から一部のほ場で発生したが、平年並で推移した。	・防除の不徹底。
ハモグリバエ類	平年：早 前年：早	平年：やや多 前年：やや少	・9月から発生が認められ、平年よりやや多く推移した。	・防除の不徹底。
コナジラミ類	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：並	・9月から発生が認められ、平年よりやや多く推移した。	・9～10月の高温。 ・侵入防止の不徹底。 ・天敵であるタバコカスミカメの定着遅延が初期発生を助長した。

(エ) 冬キャベツ（2025年10月～2026年2月）

a 菌核病

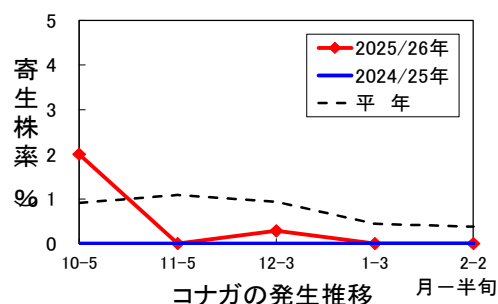
- (a) 発生経過（発生量：平年よりやや少）
- ・1～2月に発生が認められ、発生量は平年よりやや少なくて推移した。
- (b) 要因解析
- ・冬季の少雨。
- (c) 防除指導
- ・定期予報で、予防散布の実施や発病株の除去などを指導した。



b コナガ

- (a) 発生経過（発生量：平年よりやや少）
- ・10月に平年を上回る発生が認められたが、以降は平年よりやや少なくて推移した。

- (b) 要因解析
- ・薬剤防除の徹底。
- (c) 防除指導
- ・定期予報で、初期防除の徹底や薬剤のローテーション散布などを指導した。



c その他の病害虫

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
黒腐病	平年：並 前年：並	平年：やや少 前年：並	・一部ほ場で12月以降発生が認められたが、1月以降発生量が減少した。	・防除の不徹底。 ・感受性品種の罹病。 ・冬季の少雨。
軟腐病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・防除の徹底。 ・冬季の少雨。
べと病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・防除の徹底。 ・冬季の少雨。
アブラムシ類	平年：並 前年：並	平年：少 前年：並	・10月から一部ほ場で発生が認められたが、平年より少なく推移した。	・12月以降の低温傾向。 ・防除の徹底。
モンシロチョウ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・防除の徹底。
ハスモンヨトウ	平年：並 前年：並	平年：多 前年：やや少	・10月に平年を上回る発生が認められたが、11月以降発生量が減少した。	・8～10月の高温、乾燥。 ・薬剤の感受性低下。 ・防除の徹底。
オオタバコガ	平年：並 前年：並	平年：並 前年：やや少	・10月に発生が認められたが、11月以降発生量が減少した。	・8～10月の高温、乾燥。 ・防除の徹底。
シロイチモジヨトウ	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	・10月に多発生したが、11月以降発生量が減少した。	・8～10月の高温、乾燥。 ・防除の徹底。
ウワバ類	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・防除の徹底。

(オ) 冬レタス¹⁾ (2025年10月～2026年2月)

注1) 2022年まで玉レタス、2022年以降リーフレタスを調査。平年値は両方を含む過去10年間の平均に基づく。

a 灰色かび病

(a) 発生経過 (発生量：平年並)

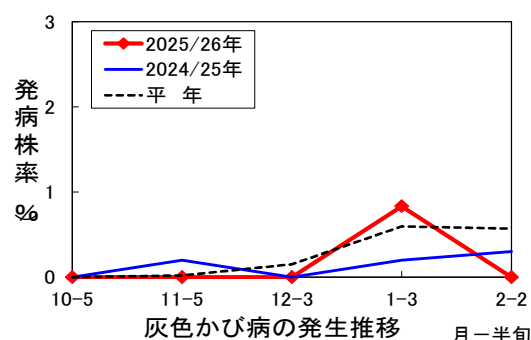
- ・1月に発生が認められ、発生量は平年並であった。

(b) 要因解析

- ・冬季の少雨。
- ・発生ほ場における防除や換気作業の不徹底。

(c) 防除指導

- ・定期予報で、予防散布の実施や発病株の除去などを指導した。

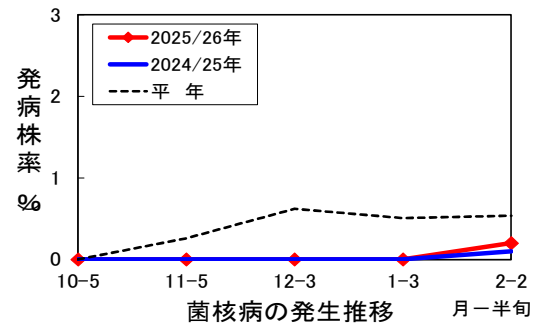


b 菌核病

(a) 発生経過 (発生量：平年よりやや少)

- ・2月に一部ほ場で発生が認められたが、期間を通して平年よりやや少ない発生量であった。

- た。
- (b) 要因解析
- ・ 冬季の少雨。
 - ・ 発生ほ場における防除や換気作業の不徹底。
- (c) 防除指導
- ・ 定期予報で、予防散布の実施や発病株の除去などを指導した。



c その他の病害虫

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
アブラムシ類	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・ 発生は認められなかった。	・ 防除の徹底。
ハスモンヨトウ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・ 発生は認められなかった。	・ 防除の徹底。
オオタバコガ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・ 発生は認められなかった。	・ 防除の徹底。
シロイチモジヨトウ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・ 発生は認められなかった。	・ 防除の徹底。

(カ) 野菜共通 (2025 年 4～11 月)

a コナジラミ類

(a) 発生経過

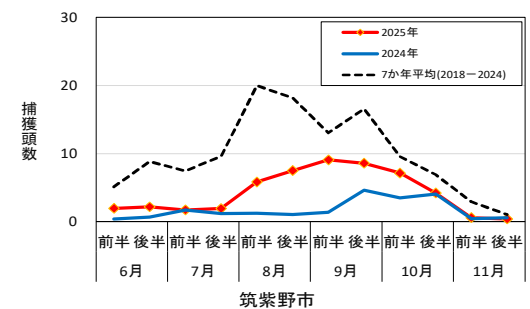
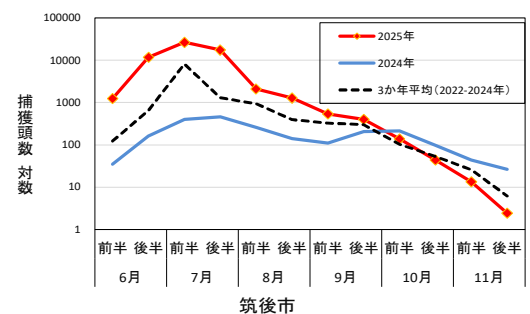
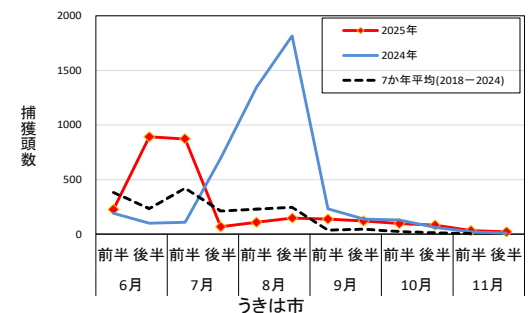
- ・ 冬春ナスでは、9 月から前年を上回る発生量となり、全体として平年よりやや多かった。
- ・ 冬春トマトでは、10 月から前年を上回る発生量となったが、以降は前年並で推移した。
- ・ うきは市での黄色粘着トラップへの捕獲数は、6 月後半～7 月前半にかけて平年を上回り、以降はおおむね平年並となった。
- ・ 筑後市での黄色粘着トラップへの捕獲数は、6 月前半～9 月前半にかけて平年を上回り、以降はおおむね平年並となった。
- ・ 筑紫野市での黄色粘着トラップへの捕獲数は、8 月前半～10 月後半にかけてピークがみられ、平年よりやや少なく推移した。

(b) 要因解析

- ・ 期間を通して高温傾向。
- ・ ハウスの隙間や開口部からの侵入。
- ・ ハウス周辺の植物残渣や雑草への寄生、増殖。
- ・ 薬剤感受性の低下。

(c) 防除指導

- ・ 定期予報で、発生状況を周知して注意喚起するとともに、ほ場周辺の雑草防除の徹底や防虫ネットの目合いなどを指導した。
- ・ キュウリにおいて、薬剤の防除効果低下が懸念されることから、薬剤感受性試験を実施し、結果を指導機関に提供した。



黄色粘着板トラップにおけるコナジラミ類捕獲数の推移

b その他の病害虫（2025 年春～秋）

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
ハスモンヨトウ	平年：並 前年：並	平年：並 前年：やや少	・フェロモントラップでの誘殺ピークは、地区によって異なるが、おおむね10月下旬～11月上旬であった。 ・野菜での発生量は平年並であった。	・8～9月の降雨によって発生が抑制された。
オオタバコガ	平年：並 前年：並	平年：並 前年：やや少	・フェロモントラップでの誘殺ピークは、地区によって異なるが、おおむね10月上旬～11月上旬であった。 ・野菜での発生量は平年並であった。	・8～9月の降雨によって発生が抑制された。

エ 特用作物

(ア) 茶（2025 年 2～9 月）

a 炭疽病

(a) 発生経過（発生量：並）

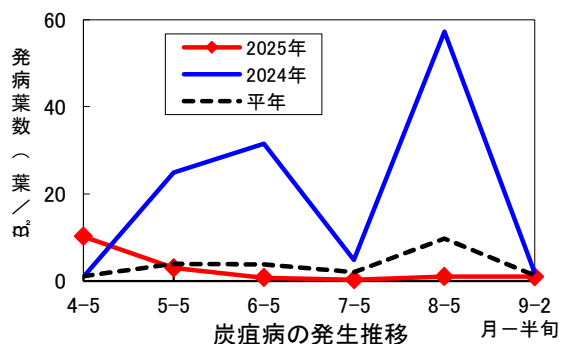
- ・4月5半旬はやや多い発生が認められたが、以降はやや少～並程度の発生となった。

(b) 要因解析

- ・前年作の多発生園では、深刈などの対策がとられた。
- ・防除が適切に行われた。

(c) 防除指導

- ・定期予報で、罹病枝の除去、適正な肥培管理、予防に重点をおいた定期防除の徹底を指導した。



b カンザワハダニ

(a) 発生経過（発生量：やや少）

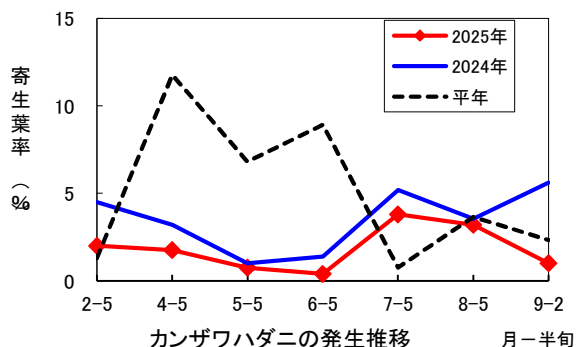
- ・越冬虫数は平年並であった。
- ・6月まではやや少なく推移し、7月以降は平年並の発生となった。

(b) 要因解析

- ・防除が適切に行われた。
- ・6月下旬以降の高温と乾燥傾向で発生が助長された。

(c) 防除指導

- ・定期予報で発生状況を周知し、適期防除やローテーション散布について指導した。



c その他の病害虫

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
もち病	平年：遅 前年：遅	平年：少 前年：並	・調査期間の発生は軽微であった。	・ほ場菌密度が低かった。 ・適期防除。
チャノコカクモンハマキ	平年：並 前年：並	平年：並 前年：やや少	・フェロモントラップへの誘殺数の発生ピークは平年とおおむね一致し、年間を通	・6月下旬以降の高温と乾燥傾向で発生が助長された。 ・フェロモントラップでは7月

			して誘殺量はやや多かった。 ・ 8 月 5 半旬調査では、ほ場でやや多発生であったが、年間を通して平年並であった。	下旬にピークがあり、8 月下旬に幼虫の寄生が多く認められた。その他の時期は防除などで平年並となった。
チャノホソガ	平年：やや遅 前年：やや遅	平年：やや多 前年：やや多	・ 4 月以降やや少なくて推移したが、7～8 月はやや多い発生となった。	・ 6 月下旬以降の高温と乾燥傾向で発生が助長された。
チャノミドリヒメヨコバイ	平年：並 前年：並	平年：並 前年：やや少	・ 4 月以降おおむね平年並に推移した。	・ 防除が適切に行われた。
チャノキイロアザミウマ	平年：並 前年：並	平年：やや少 前年：やや少	・ 4 月以降おおむね平年よりやや少なくて推移した。	・ 防除が適切に行われた。
チャハマキ	平年：並 前年：並	平年：並 前年：やや少	・ フェロモントラップへの誘殺数は、年間を通してやや少なかった。	・ 防除が適切に行われた。
チャトゲコナジラミ	平年：早 前年：早	平年：やや少 前年：やや少	・ 4 月はやや多発生であったが、以降はやや少なくて推移した。	・ 防除が適切に行われた。

(2) 主要病害虫の発生面積および防除面積

農作物名	作付面積	有害動植物名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
			甚	多	中	少	計	実	延
水稻(普通期)	34,500ha	苗立枯病	0	0	0	0	0	27,600	27,600
		葉いもち	0	1,440	720	17,970	20,130	34,500	34,500
		穂いもち	0	0	5,030	9,340	14,380	34,500	34,500
		紋枯病	720	720	2,880	23,000	27,310	34,500	34,500
		白葉枯病	0	0	0	0	0	31,050	31,050
		ばか苗病	0	0	0	0	0	24,150	24,150
		イネシンガレセンチュウ	0	0	0	0	0	31,050	31,050
		もみ枯細菌病	0	0	0	2,880	2,880	34,500	34,500
		ごま葉枯病	0	0	0	0	0	34,500	34,500
		縞葉枯病	0	0	0	720	720	34,500	34,500
		稲こうじ病	0	0	0	2,160	2,160	34,500	34,500
		ニカメイガ	0	0	0	0	0	34,500	34,500
		セジロウンカ	0	0	720	32,340	33,060	34,500	86,250
		トビイロウンカ	0	0	0	9,340	9,340	34,500	86,250
		ヒメトビウンカ	0	3,590	2,160	28,750	34,500	34,500	86,250
		ツマグロヨコバイ	0	0	0	27,310	27,310	34,500	86,250
		イネドロオイムシ	0	0	0	0	0	31,050	31,050
		イネクロカメムシ	0	0	0	0	0	34,500	51,750
		斑点米カメムシ類	2,160	2,160	5,030	12,220	21,560	34,500	51,750
		フタオビコヤガ	0	0	0	2,160	2,160	31,050	31,050
		コブノメイガ	0	0	3,590	7,190	10,780	34,500	34,500
		イネミズゾウムシ	0	0	0	0	0	31,050	31,050
		スクミリンゴガイ	2,880	3,590	4,310	8,630	19,410	34,500	34,500
麦類 (令和7年産) 大麦 小麦	21,560ha	さび病類	0	0	0	0	0	8,944	9,838
	6,120ha 15,440ha	うどんこ病	965	0	0	0	965	21,242	31,863
		赤かび病	0	0	0	3,860	3,860	22,360	44,720
		黒穂病類	0	0	965	0	965	20,124	20,124
		大麦縞萎縮病	0	0	0	0	0	0	0
		小麦縞萎縮病	0	0	0	0	0	0	0
		斑葉病	0	0	0	0	0	6,120	6,120
		黄斑病	1,930	965	965	8,685	12,545	15,440	15,440
		網斑病	1,669	1,113	0	556	3,338	6,120	6,120
		シロヒムシ類	0	0	0	0	0	15,440	15,440
大豆 (令和7年産)	6,923ha	紫斑病	0	0	0	3,460	3,460	6,923	9,207
		さび病	0	0	0	580	580	0	0
		べと病	2,310	1,150	0	3,460	6,920	553	830
		葉焼病	0	0	580	1,730	2,310	553	830
		アブラムシ類	0	0	0	2,880	2,880	0	0
		ハスモンヨトウ	0	0	2,880	2,310	5,190	6,923	17,307
		マメシンクイガ	0	0	0	690	690	6,923	17,307
		吸実性カメムシ類	580	1,150	2,310	2,880	6,920	6,923	10,384
		フタスジヒメハムシ	0	1,150	1,730	3,460	6,350	623	623
かんきつ	1,080ha	そうか病	0	0	98	196	295	1,080	1,080
		黒点病	0	0	0	393	393	1,080	5,400
		かいよう病	0	0	0	196	196	1,080	2,160
		ミカンハダニ	0	0	295	687	982	1,080	4,320
		チャノキイロアザミウマ	0	0	98	687	785	1,080	1,080
		アブラムシ類	0	0	0	0	0	1,080	2,160
なし	298ha	黒斑病	0	0	0	0	0	298	894
		黒星病	0	27	0	54	81	298	5,364
		赤星病	0	0	0	54	54	298	894
		シンクイガ類	0	0	0	54	54	298	1,788
		ハマキムシ類	0	0	0	27	27	298	596
		ハダニ類	0	0	0	108	190	298	1,192
		カメムシ類	0	0	0	108	108	298	2,086
		カイガラムシ類	0	0	0	0	0	298	1,788
		アブラムシ類	0	0	54	54	108	298	596
ぶどう	473ha	晩腐病	0	0	0	118	326	473	2,838
		褐斑病	0	0	0	95	521	473	946
		黒とう病	0	0	0	315	315	473	946
		べと病	0	0	0	284	284	473	946
		灰色かび病	0	0	0	158	260	473	473
		チャノキイロアザミウマ	0	0	0	284	284	473	946

農作物名	作付面積	有害動植物名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
			甚	多	中	少	計	実	延
かき	1,070ha	炭そ病	0	0	0	268	268	1,070	10,700
		カキノヘタムシガ	0	0	0	89	89	1,070	3,210
		フジコナカイガラムシ	0	89	0	446	535	1,070	6,420
		カメムシ類	0	89	89	268	446	1,070	7,490
		ハマキムシ類	0	0	357	446	803	1,070	3,210
		カキクダアザミウマ	0	0	0	0	0	1,070	2,140
キウイフルーツ	238ha	かいよう病	0	0	0	56	256	238	714
茶	1,440ha	炭そ病	715	143	0	286	1,144	1,440	7,200
		もち病	0	0	0	143	0	1,440	4,320
		ハマキムシ類	0	143	0	858	1,001	1,440	5,760
		チャノホソガ	0	0	143	858	1,001	1,440	4,320
		チャノミドリヒメヨコバイ	0	0	429	1,001	1,287	1,440	7,200
		カンザワハダニ	715	286	143	0	1,144	1,440	7,200
		チャノキイロアザミウマ	0	0	0	1,144	1,144	1,440	8,640
		クワシロカイガラムシ	0	0	0	432	432	1,440	2,880
		チャトゲコナジラミ	858	429	0	0	1,287	1,440	2,880
冬春トマト (令和7年産)	107ha	疫病	0	0	0	0	0	107	642
		灰色かび病	0	0	0	33	33	107	642
		葉かび病	0	0	0	17	17	107	642
		すすかび病	0	0	0	50	50	107	642
		うどんこ病	0	0	0	17	17	107	642
		黄化葉巻病	0	0	0	33	33	107	642
		コナジラミ類	0	0	0	83	83	107	642
		ハモグリバエ類	0	0	0	0	0	107	321
		アブラムシ類	0	0	0	0	0	107	642
		アザミウマ類	0	0	0	0	0	107	642
冬春ナス (令和7年産)	101ha	うどんこ病	14	29	14	29	86	101	505
		灰色かび病	0	0	0	14	14	101	505
		すすかび病	0	14	43	43	100	101	505
		ミナミキイロアザミウマ	0	14	14	29	57	101	303
		コナジラミ類	29	29	14	29	101	101	202
		ハモグリバエ類	0	0	0	57	57	101	101
		アブラムシ類	0	0	0	57	57	101	202
		ハダニ類	0	0	0	57	57	101	101
冬キャベツ (令和7年産)	372ha	黒腐病	0	0	0	11	11	372	1,116
		菌核病	0	0	0	16	16	372	744
		軟腐病	0	0	0	0	0	372	744
		べと病	0	0	0	0	0	372	744
		アブラムシ類	0	0	0	5	5	372	1,116
		ウワバ類	0	0	0	0	0	372	1,116
		モンシロチョウ	0	0	0	0	0	372	1,116
		コナガ	0	0	13	11	24	372	1,488
		オオタバコガ	0	0	27	11	37	372	1,116
		ハスモンヨトウ	0	0	27	0	27	372	1,488
		シロイチモジヨトウ	0	0	27	5	32	372	1,488
			0	0	0	0	0	372	1,488
冬レタス (令和7年産)	578ha	灰色かび病	0	0	0	10	10	578	867
		菌核病	0	0	0	10	10	578	867
		アブラムシ類	0	0	0	0	0	578	1,156
		ハスモンヨトウ	0	0	0	0	0	578	1,156
		オオタバコガ	0	0	0	0	0	578	1,156
		シロイチモジヨトウ	0	0	0	0	0	578	1,156
冬春イチゴ (令和7年産)	414ha	灰色かび病	0	0	0	207	207	414	1,656
		うどんこ病	0	0	0	30	30	414	1,656
		炭そ病	0	0	30	207	237	414	828
		萎黄病	0	0	0	0	0	414	414
		菌核病	0	0	0	30	30	414	414
		アブラムシ類	0	0	0	414	414	414	1,242
		アザミウマ類	30	0	30	88	148	414	1,656
		コナジラミ類	0	0	0	89	89	414	1,242
		ハダニ類	0	59	89	118	266	414	2,070
		オオタバコガ	0	0	0	59	59	414	828
		ハスモンヨトウ	0	0	30	118	148	414	828
		シロイチモジヨトウ	0	0	0	30	30	414	828

II 情報の提供実績

令和7年度指定有害動植物発生予察事業実施計画2の(4)、福岡県病虫害発生予察事業実施要領第6、および令和7年度侵入調査事業計画に基づく病虫害の発生状況調査結果を基に、防除を適期かつ合理的・経済的に行う多面に必要な情報を関係者へ提供した。

1 情報の種類と発表回数

(1) 情報の種類

- ア 発生予報：有害動植物の発生予想を定期的に発表するもの。発表時期と回数は、農作物や有害動植物の性質を考慮し、防除に有効利用できるよう定める。記載事項は、有害動植物名とその発生時期、面積、地域、程度、および予報の根拠の概要、防除上注意すべき事項（防除の要否、回数、防除時期、使用薬剤等）、その他必要な事項とする。なお、発生程度は平年比および前年比で示す。
- イ 警報：指定有害動植物が大発生することが予想され、かつ、早急に防除措置を講ずる必要が認められる場合に発表するもの。記載事項は、有害動植物名、発生が予想される地域とその時期、発生程度、防除時期と防除法、その他必要な事項とする。
- ウ 注意報：警報を発表するほどではないが、重要な有害動植物が多発生することが予想され、かつ、早めに防除措置を講ずる必要が認められる場合に発表するもの。記載事項は、有害動植物名、発生が予想される地域とその時期、発生程度、防除時期と防除法、その他必要な事項とする。
- エ 特殊報：新規な有害動植物を発見した場合、もしくは既存の有害動植物であっても発生消長に特異的な現象が認められた場合に発表するもの。記載に当たっては、その内容の問題性・重要性、情報発表の意義等について、必要に応じて解説するものとする。
- オ 速報：有害動植物の発生消長に著しい変化があると予想され、又は発生消長を速やかに周知する必要が認められた場合に発表するもの。記載事項は、その内容に応じて必要な事項とする。
- カ 技術情報：有害動植物の発生状況や防除の情報について、病虫害防除所長が必要と認めた場合に発表するもの。記載事項は、その内容に応じて必要な事項とする。

(2) 発表回数

種 類	令和7年	(前年度)
発生予報	12	(12)
警報	0	(0)
注意報	1	(7)
特殊報	2	(2)
速報	1	(1)
技術情報	14	(14)
合 計	30	(36)

2 情報の発表状況

(1) 発生予報

	発表月日	対象作物	対象病害虫
第1号	3月28日	かんきつ なし イチゴ 冬春トマト 冬春ナス	そうか病、かいよう病、ミカンハダニ 黒星病 灰色かび病、うどんこ病、ハダニ類 灰色かび病、コナジラミ類 灰色かび病、すすかび病、ミナミキイロアザミウマ
第2号	4月30日	かんきつ なし かき 果樹共通 茶	そうか病、ミカンハダニ 黒星病、赤星病 フジコナカイガラムシ 果樹カメムシ類 カンザワハダニ、チャノキイロアザミウマ、チャノミドリヒメヨコバイ、チャトゲコナジラミ
第3号	5月30日	かんきつ なし かき 果樹共通 茶	そうか病、ミカンハダニ 黒星病、ハダニ類 炭疽病、フジコナカイガラムシ、ハマキムシ類 果樹カメムシ類 炭疽病、もち病、カンザワハダニ、チャノコカクモンハマキ、チャノキイロアザミウマ、チャトゲコナジラミ、チャノミドリヒメヨコバイ
第4号	7月1日	水稻（普通期） かんきつ なし かき 果樹共通 イチゴ（育苗期） 茶	セジロウンカ、トビイロウンカ 黒点病、かいよう病、ミカンハダニ 黒星病、ナシヒメシンクイ、ハダニ類 炭疽病、フジコナカイガラムシ、ハマキムシ類 果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ） うどんこ病、炭疽病、ハダニ類 炭疽病、カンザワハダニ、チャノコカクモンハマキ チャノホソガ、チャノキイロアザミウマ、チャノミドリヒメヨコバイ、チャトゲコナジラミ
第5号	7月31日	水稻（普通期） 大豆 かんきつ なし かき 果樹共通 イチゴ（育苗期） 野菜共通 茶	いもち病、紋枯病、セジロウンカ、トビイロウンカ、コブノメイガ ハスモンヨトウ 黒点病、ミカンハダニ 黒星病、ナシヒメシンクイ、ハダニ類 炭疽病、フジコナカイガラムシ、ハマキムシ類、カキノヘタムシガ 果樹カメムシ類 炭疽病、ハダニ類 コナジラミ類 炭疽病、カンザワハダニ、チャノコカクモンハマキ、チャノホソガ、チャノキイロアザミウマ、チャノミドリヒメヨコバイ、チャトゲコナジラミ
第6号	8月29日	水稻（普通期） 大豆 かんきつ かき 果樹共通 イチゴ（育苗期） 野菜共通 茶	いもち病、紋枯病、トビイロウンカ、斑点米カメムシ類 ハスモンヨトウ、吸実性カメムシ類 黒点病、ミカンハダニ 炭疽病、フジコナカイガラムシ、ハマキムシ類 果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ） 炭疽病、ハダニ類 ハスモンヨトウ、オオタバコガ、コナジラミ類 炭疽病、もち病、カンザワハダニ、チャノコカクモンハマキ、チャノホソガ、チャノキイロアザミウマ、チャノミドリヒメヨコバイ、チャトゲコナジラミ
第7号	10月1日	大豆 かんきつ かき 果樹共通 イチゴ 冬春ナス 野菜共通	ハスモンヨトウ、吸実性カメムシ類 ミカンハダニ 炭疽病、フジコナカイガラムシ 果樹カメムシ類 うどんこ病、炭疽病、ハダニ類 ミナミキイロアザミウマ ハスモンヨトウ、オオタバコガ、コナジラミ類
第8号	10月30日	イチゴ 冬春ナス 冬レタス 冬キャベツ 野菜共通	うどんこ病、炭疽病、ハダニ類 灰色かび病、すすかび病、ミナミキイロアザミウマ 灰色かび病、菌核病 黒腐病、菌核病、コナガ ハスモンヨトウ、オオタバコガ、コナジラミ類

第9号	11月29日	イチゴ 冬春トマト 冬春ナス 冬レタス 冬キャベツ	灰色かび病、うどんこ病、ハダニ類 すすかび病、コナジラミ類 灰色かび病、すすかび病、ミナミキイロアザミウマ 灰色かび病、菌核病 黒腐病、菌核病、コナガ
第10号	12月19日	イチゴ 冬春トマト 冬春ナス 冬レタス 冬キャベツ	灰色かび病、うどんこ病、ハダニ類 すすかび病、コナジラミ類 灰色かび病、すすかび病、ミナミキイロアザミウマ 灰色かび病、菌核病 黒腐病、菌核病、コナガ
第11号	1月23日	イチゴ 冬春トマト 冬春ナス 冬レタス 冬キャベツ	灰色かび病、うどんこ病、ハダニ類 すすかび病、コナジラミ類 灰色かび病、すすかび病、ミナミキイロアザミウマ 灰色かび病、菌核病 黒腐病、菌核病、コナガ
第12号	2月27日	イチゴ 冬春トマト 冬春ナス 茶	灰色かび病、うどんこ病、ハダニ類 灰色かび病、すすかび病、コナジラミ類 灰色かび病、すすかび病、ミナミキイロアザミウマ カンザワハダニ

(2) 注意報

	発表月日	対象作物	対象病害虫
第1号	7月22日	水稻	斑点米カメムシ類

(3) 特殊報

	発表月日	対象作物	対象病害虫
第1号	9月17日	ナス	フタテンミドリヒメヨコバイ
第2号	3月3日	キュウリ	キュウリ黒点根腐病

(4) 速報

	発表月日	対象作物	対象病害虫
第1号	6月18日	水稻	イネ縞葉枯病

(5) 技術情報

	発表月日	対象作物	対象病害虫
第1号	4月14日	なし	赤星病
第2号	6月11日	トマト、ミニトマト	トマトキバガ
第3号	6月11日	ファレノプシス	ファレノプシス株枯病
第4号	7月10日	水稻	海外飛来性害虫(セジロウカ、トビイロウカ、コブノメカ)
第5号	7月31日	果樹全般	果樹カメムシ類(チャハネアカメシ、ツヤアカメシ他)
第6号	8月22日	水稻	海外飛来性害虫(セジロウカ、トビイロウカ)
第7号	9月19日	果樹全般	果樹カメムシ類(チャハネアカメシ、ツヤアカメシ他)
第8号	10月22日	トマト、ミニトマト	トマトキバガ
第9号	10月31日	施設キュウリ、 施設花き(ダリア)	タバココナジラミ
第10号	1月20日	イチゴ(親株)	イチゴ炭疽病
第11号	1月20日	キウイフルーツ	キウイフルーツかいよう病
第12号	1月26日	果樹全般	果樹カメムシ類(チャハネアカメシ)
第13号	2月10日	イチゴ	イチゴ炭疽病
第14号	3月26日	麦類	赤かび病

3 情報の提供先

県内関係機関、農業団体、市町村・国の機関あてFAX、電子メール、郵送するほか、ホームページ(<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo.html>)へ掲載、X(旧Twitter)へ投稿することで、病虫害発生予察情報を提供している。

情報提供先一覧

区分	提 供 先	提 供 方 法 別 件 数			
		F A X	電子メール	郵 送	計
県	農林水産政策課 食の安全・地産地消課 団体指導課 園芸振興課 水田農業振興課 経営技術支援課生産資材係		6		50
	農林事務所		6		
	農林業総合試験場 (企画部、豊前分場、筑後分場、八女分場、資源活用研究センター)		5		
	農林事務所普及指導センター		10		
	農業大学校		1		
	病虫害防除員			22	
	県 計	0	28	22	
農業団体	全国農業協同組合連合会福岡県本部 (営農開発部、農産部、園芸部) (農機資材部)	3	1		30
	農業協同組合(農産もしくは園芸担当課)	13	7		
	福岡県農業共済組合本所 福岡県農業共済組合支所 (筑前福岡、筑後川流域、筑後、筑豊、京築・北九州)	5	1		
	農業団体 計	21	9	0	
市町村	市町村(農政担当課)	35	25		60
	市町村 計	35	25	0	
その他	農林水産省消費・安全局		1		7
	九州農政局消費・安全部		1		
	九州農政局福岡県拠点	1			
	門司植物防疫所	1			
	(独)九州沖縄農業研究センター	1			
	(財)日本植物防疫協会		1		
	日本農業新聞 九州支所		1		
	その他 計	3	4	0	
合 計		59	66	22	147

※令和8年3月末時点

「公印省略」

各 関 係 機 関 団 体 の 長 } 殿
各 病 害 虫 防 除 員 }

7 農 林 試 第 1 2 7 4 号
令 和 7 年 7 月 2 2 日

福岡県農林業総合試験場長
(福岡病害虫防除所)

令和7年度病害虫発生予察注意報第1号について

このことについて、病害虫発生予察注意報第1号(水稻の斑点米カメムシ類)を発表したので送付します。

注意報第1号

1 対象作物名: 水稻

2 病害虫名: 斑点米カメムシ類

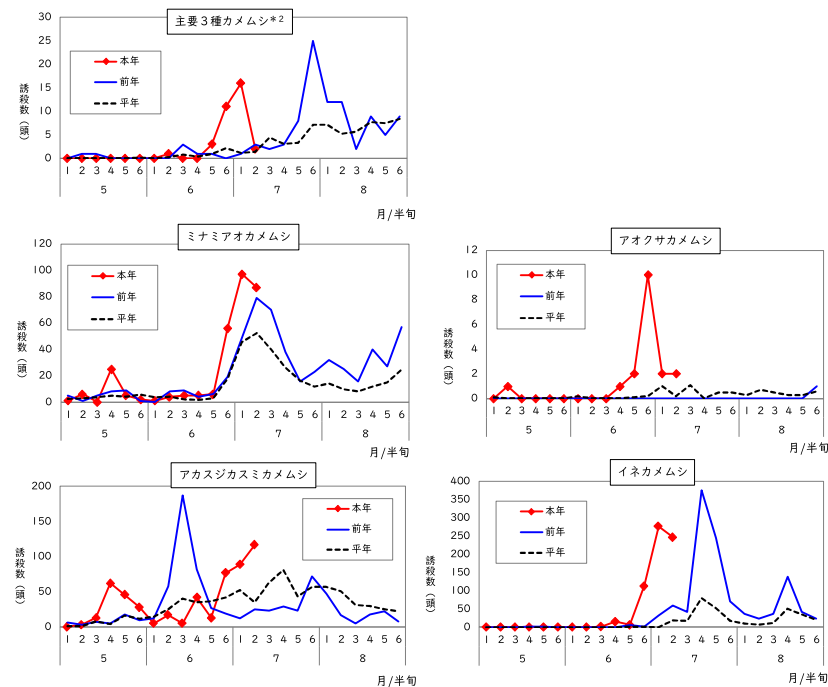
3 発生予想: 多

4 予報の根拠

- (1) 県内5か所の予察灯における5月から7月2半旬までの斑点米カメムシ類の誘殺数は1,531頭(平年533頭 前年785頭)で、平年・前年より多く、特に6月5半旬より急増している(図1)。
- (2) 特にイネカメムシの予察灯における誘殺数は年々増加傾向にあり、他の斑点米カメムシ類より多く、県南部の予察灯でも確認されている(データ略 防除所ホームページ参照)。また、県内の水稻ほ場での発生地域も拡大傾向にある。
- (3) 7月2半旬の県北地域の早期水稻のすくい取り調査で、イネカメムシの成虫が確認されている。
- (4) 福岡管区气象台7月17日付発表の1か月予報では、向こう1か月の気温(7/19~8/18)は高く、降水量は平年並みか少ない見込みであり、本虫の発生に好適である。

5 防除上注意すべき事項

- (1) 斑点米カメムシ類の飛来・増殖源である畦畔・休耕田の草刈りを出穂2週間前までに実施する。なお、出穂後の草刈りは、本虫のほ場内への侵入を助長するので避ける。
- (2) 防除は、穂揃い期とその7~10日後の2回防除が基本であるが、その後も発生が見られる場合は、追加防除を行う。
- (3) イネカメムシは、出穂直後から本田へ飛来して吸汁加害するため、防除適期は出穂期とその7~14日後で、他の斑点米カメムシ類の防除適期と異なるので注意する。また、周囲より出穂が早いほ場では、出穂期に集中的に加害を受けると不稔穂が発生し、収量に影響するため特に注意する。
- (4) 薬剤散布にあたっては、農業使用基準を遵守するとともにミツバチ等の周辺環境に配慮する。



*1 県内5か所 筑紫野市、糸島市、遠賀町、みやま市、苅田町(みやま市、苅田町は本年より移転)
*2 主要3種カメムシは、クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシの合計誘殺数

図1 予察灯における斑点米カメムシ類誘殺数の推移



写真1 イネカメムシ成虫・幼虫 写真2 ホソハリカメムシ成虫 写真3 クモヘリカメムシ成虫

病害虫防除所のホームページでは、各種病害虫の発生状況を随時更新しています。
発生状況の把握や防除の参考にご活用下さい。

○福岡県病害虫防除所のホームページへのアクセス

URL: <https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo.html>または下記QRコード①

○Xアカウント(福岡県農作物病害虫情報)へのアクセス

定期情報や警報等発出のお知らせをしています。

URL: https://x.com/PPDPO_Fukuoka または下記 QR コード②

公印省略

QR コード①



QR コード②



(1) 注意報

「公印省略」

7 農林試 1789 号
令和 7 年 9 月 19 日各関係機関団体の長 } 殿
各病虫害防除員 }福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

令和 7 年度病虫害発生予察特殊報第 1 号について

このことについて、下記のとおり発表したので送付します。

特殊報第 1 号

1 害虫名 フタテンミドリヒメヨコバイ
学名: *Amrasca biguttula* (Ishida)

2 発生作物 ナス

3 発生の経過と概要

令和 6 年 12 月、県南部の冬春ナス生産施設において、葉が黄化、褐変する症状が確認された。本症状の拡大は 1 月にはみられなくなったが、5 月に再発、ほ場に蔓延した。調査の結果、被害株上にて翅中央後方に一対の黒点があるヨコバイが確認された（写真 1）。本虫体を農林水産省門司植物防疫所に同定依頼をしたところ、本県ではこれまで未確認のフタテンミドリヒメヨコバイであることが判明した。

4 国内での発生状況

沖縄県で継続的に発生しているほか、平成 17 年に東京都小笠原諸島、令和 2 年に熊本県、令和 3 年に高知県、令和 4 年に徳島県、令和 5 年に宮崎県、令和 6 年に岡山県で発生が確認され、ナス、オクラ、ハイビスカスに対する被害が確認されている。

5 本種の特徴

(1) 形態

成虫は体長 2.7mm 前後。頭胸部は黄緑色で、頭頂部と翅の中央後方に一対の黒点がある。
3～5 齢幼虫は全身がほぼ黄緑色で、胸部背面に 4 個の黒点がある。

(2) 生態

本種は年間で 7 世代発生するとされており、沖縄県での発生は 5～10 月で、特に 7～8 月に多発する。雌成虫は、葉脈に黄白色の卵を一度に 15 個ほど産卵する。卵はふ化直前に灰色がかった黄色になる。卵は 4～11 日でふ化し、幼虫期間は 7～21 日、成虫の寿命は 35～50 日である。

(3) 被害

幼虫、成虫ともに新葉や茎から吸汁する。葉の黄化、萎縮、奇形を呈し、成長が抑制される（写真 2、3）。

6 防除対策

- (1) 防除にあたっては、本虫に対し登録のある農薬を使用する。
- (2) 施設栽培においては成虫の侵入を防ぐために、開口部に 2mm 目以下の防虫ネットを設置する。
- (3) 収穫残さは発生源となるため、早期に適切に処分するとともに、施設栽培においては栽培終了後に閉め込み、太陽熱消毒を行う。



写真 1 被害株上のフタテンミドリヒメヨコバイ



写真 2 ほ場での被害状況



写真 3 被害葉の症状

病虫害防除所のホームページでは、各種病虫害の発生状況を随時更新しています。

発生状況の把握や防除の参考にご活用下さい。

○福岡県病虫害防除所のホームページへのアクセス

URL: <https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo.html> または下記 QR コード①

○Xアカウント（福岡県農作物病害虫情報）へのアクセス

定期情報や警報等発出のお知らせをしています。

公印省略 URL: https://x.com/PPDPO_Fukuoka または下記 QR コード②

QR コード①



QR コード②

7 農林試 3325 号
令和 8 年 3 月 3 日

各関係機関団体の長 } 殿
各病虫害防除員 }

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

令和7年度病虫害発生予察特殊報第2号について

このことについて、下記のとおり発表したので送付します。

特殊報第2号

1 病害名 黒点根腐病
学名: *Monosporascus cannonballus* Pollack & Uecker

2 発生作物 キュウリ (カボチャ台木)

3 発生の経過と概要

令和7年9月下旬、県北部のキュウリ栽培施設において、ハウスの約1割の株で萎凋症状(図1)が発生し、約2週間後に枯死に至った。当該被害株の根部は褐色に腐敗し、表面に複数小黒点(子のう殻)が確認された(図2、3)。罹病株について農林水産省門司植物防疫所に同定依頼をしたところ、本県ではこれまで未確認のキュウリ黒点根腐病であることが判明した。

4 国内での発生状況

キュウリ(カボチャ台木)黒点根腐病は、平成23年に滋賀県、平成26年に岡山県、令和7年に高知県で発生が確認されている。なお、自根キュウリでは、平成18年に岩手県で確認されている。本県では、キュウリ(カボチャ台木)黒点根腐病は初確認である。

5 本病の特徴

(1) 病徴

収穫期頃から地上部に萎凋症状が見え始める。発病初期には晴天の日中に萎凋し、朝夕や曇雨天には回復する。これを繰り返した後、急激に枯れ上がる。根は、初め細根が腐敗脱落し、残った根はアメ色に腐敗する。症状が進むと根部表面に直径0.3mm程度の小黒点(子のう殻)が形成される(図2)。

(2) 生態

病原菌はウリ科作物を特異的に侵す。培地上では11~37.5℃で生育し、最適温度は30℃前後と高めである。罹病株の根部に形成された子のう核は長期間土壌中に残存し、伝染源となる。

6 防除対策

(1) 罹病株は見つけ次第抜き取って処分する。残根はできるだけほ場に残らないよう丁寧に処理する。

- (2) 土壌の過湿や乾燥を避け、根の生長を促進し、被害の軽減を図る。
(3) 本病の発生したほ場の耕起、整地を行った管理作業機に付着した土壌は丁寧に洗い落とす。



図1 ほ場での発生状況



図2 根上に形成された小黒点(子のう核)



図3 子のう核内部の子のう胞子(顕微鏡観察)

病虫害防除所のホームページでは、各種病虫害の発生状況を随時更新しています。

発生状況の把握や防除の参考にご活用下さい。

○福岡県病虫害防除所のホームページへのアクセス

URL: <https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo.html> または下記QRコード①

○Xアカウント(福岡県農作物病虫害情報)へのアクセス

定期情報や警報等発出のお知らせをしています。

URL: https://x.com/PPDPO_Fukuoka または下記QRコード②

QRコード①



QRコード②



Ⅲ 国内検疫事業

1 侵入調査事業

国内未発生または国内の一部にのみ分布し、まん延した場合に有用な植物に重大な損害を与えるおそれがある侵入警戒有害動植物について、国内への侵入や分布の状況を把握するため、植物防疫法（昭和25年5月4日 法律第151号）第十六条の七の2および国が定める侵入調査事業計画に基づき、誘殺トラップや現地ほ場での発生状況を調査した。

本年度は、県内でミカンコミバエ種群が発見されたため、「九州におけるミカンコミバエ種群誘殺時の対応マニュアル」に基づき初動対応を実施した。

（１）ミカンコミバエ種群、ウリミバエ、セグロウリミバエ、クインスランドミバエ、チチュウカイミバエ

①平時の侵入調査

ア 調査場所および地点数

（ア）ミカンコミバエ種群、ウリミバエ、セグロウリミバエ、クインスランドミバエ
糸島市（2地点）、筑紫野市、福津市、岡垣町、みやこ町、久留米市、筑後市、柳川市、みやま市

合計：10 地点

（イ）チチュウカイミバエ

糸島市、筑紫野市、福津市、みやこ町、久留米市、筑後市、みやま市

合計：7 地点

イ 調査期間および回数

令和7年4～11月、令和8年3月の2半旬と5半旬（期間内18回調査）

ウ 調査方法

ミカンコミバエ、ウリミバエ、セグロウリミバエ、クインスランドミバエの誘引・殺虫混合剤であるユーゲルアD8、またはチチュウカイミバエの誘引剤メドフライコールを入れたスタイナー型トラップをそれぞれ設置し、誘殺数を調査した。

エ 調査結果

いずれの地点でも誘殺は確認されなかった。

②ミカンコミバエ種群の誘殺確認に対する「初動対応」

ア 連絡会議

門司植物防疫所福岡支所が実施したトラップ調査において、福岡市（誘殺日：令和7年6月19日）および久留米市（誘殺日：令和7年7月2日）で、ミカンコミバエ種群が1頭ずつ確認された。これを受け、関係機関で構成する連絡会議が開催され、発見の経緯報告、対応方針、今後の調査予定について協議が行われた。

開催日	開催場所	出席者
6月20日	門司植物防疫所福岡支所	門司植物防疫所福岡支所、福岡市役所、福岡県経営技術支援課、福岡県病虫害防除所
7月9日	WEB 会議	門司植物防疫所福岡支所、久留米市役所、小郡市役所、久留米普及指導センター、福岡県経営技術支援課、福岡県病虫害防除所、佐賀県

イ 寄主果実調査

確認直後および確認 2～4 週間後に、確認地点から半径 2 km 円内にある寄主果実の成熟果を調査サンプルとして採取した。採取した果実は、植物防疫所が一定期間保管後、切開調査した。

福岡市、久留米市ともに 2 回の寄主果実調査において、寄生は確認されなかった。

調査地域	果実採取日	採果数	果実切開日	結果
福岡市	6月25日	95	6月30日	寄生果なし
	7月8日	171	7月14日	寄生果なし
久留米市	7月15日	83	7月22日	寄生果なし
	8月20日	14	8月25日	寄生果なし

※予察課対応外も含む

ウ トラップの設置および調査

誘殺確認地点から半径 5 km 円内に、35 基以上を目標にトラップを増設した。なお、海や川があればそれを考慮して基数を減らした。調査開始後 2 週間までは週 2 回調査、3 週間目から 6 週間目までは週 1 回調査とし、その後は 2 週間に 1 回の調査とした。

(ア) 福岡市確認地点およびその周辺

- a 調査場所および地点数 福岡市 20 地点 **合計：20 地点**
 ※既設の平時侵入調査 8 地点、6 月 25 日に誘殺が確認された福岡市 1 地点に加え、11 地点にトラップを増設した計 20 地点を調査対象とした。調査 6 週目（8 月 5 日）に誘殺がなかったため、調査 9 回目（8 月 13 日）以降は 15 地点（既設 9、増設 6）に減じて調査した。
- b 調査期間および回数 令和 7 年 6 月～9 月（期間内 12 回調査）
- c 調査方法
 ミカンコミバエの誘引剤メチルオイゲノール単剤を入れたスタイナー型トラップを設置し、誘殺の有無を確認した。誘殺虫は、植物防疫所が持ち帰り同定・調査。
- d 調査結果
 いずれの地点でもミカンコミバエ種群の誘殺は確認されなかった（表 1）。

(イ) 久留米市確認地点およびその周辺

- a 調査場所および地点数
 久留米市（31 地点）、小郡市（1 地点）、佐賀県鳥栖市（3 地点） **合計：35 地点**
 ※7 月 16 日に誘殺が確認された久留米市 1 地点に加え、34 地点にトラップを増設した計 35 地点を調査対象とした。調査 6 週目（8 月 20 日）に誘殺がなかったため、調査 10 回目（9 月 17 日）以降は 15 地点（県内 14 地点）に減じて調査した。なお、佐賀県内でのトラップ設置および調査は、佐賀県が実施。
- b 調査期間および回数 令和 7 年 7 月～10 月（期間内 13 回調査）
- c 調査方法
 ミカンコミバエの誘引剤メチルオイゲノール単剤を入れたスタイナー型トラップを設置し、誘殺の有無を確認した。誘殺虫は、植物防疫所が持ち帰り同定・調査。
- d 調査結果
 いずれの地点でもミカンコミバエ種群の誘殺は確認されなかった（表 2）。

表 1 福岡市の確認地点およびその周辺の既設・増設トラップ調査結果

	6月26日	7月1日	7月3日	7月8日	7月15日	7月22日	7月29日	8月5日	8月13日	8月27日	9月10日	9月26日	(単位:頭) 合計
福岡市1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
福岡市2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
福岡市3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
福岡市4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
福岡市5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
福岡市6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
福岡市7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
福岡市8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
福岡市9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
福岡市10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
福岡市11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
福岡市12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	0
福岡市13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	0
福岡市14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
福岡市15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	0
福岡市16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	0
福岡市17	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
福岡市18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	0
福岡市19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
福岡市20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

※ 1. 福岡市 1 は確認地点、福岡市 2～9 は既設地点、福岡市 10～20 は増設地点。予察課対応外も含む。
2. 「-」は未調査。

表 2 久留米市の確認地点及びその周辺の増設トラップ調査結果

	7月17日	7月22日	7月24日	7月29日	7月31日	8月6日	8月14日	8月20日	9月3日	9月17日	10月1日	10月15日	10月22日	(単位:頭) 合計
久留米市1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
久留米市2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
久留米市3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	0
久留米市4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
久留米市5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	0
久留米市6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	0
久留米市7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
久留米市8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
久留米市9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	0
久留米市10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
久留米市11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	0
久留米市12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	0
久留米市13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	0
久留米市14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	0
久留米市15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	0
久留米市16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
久留米市17	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	0
久留米市18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	0
久留米市19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	0
久留米市20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	0
久留米市21	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
久留米市22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	0
久留米市23	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
久留米市24	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	0
久留米市25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	0
久留米市26	0	0	0	0	0	0	0	0	0					0
久留米市27	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
久留米市28	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
久留米市29	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
久留米市30	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	0
久留米市31	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
小郡市1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

※ 1. 久留米市 1 は確認地点、久留米市 2 以降は増設地点。佐賀県内のトラップは佐賀県が調査しているため除外。
2. 「-」は未調査

エ 初動防除

まん延を防止するため、確認地点から半径 2 km 円内の地域を中心にテックス板を設置し、半径 50m 円内にベイト剤の散布を行った。

実施地域	防除日	防除内容
福岡市	6月25日	テックス板の設置(214枚)
	6月26日	ベイト剤500ml散布
久留米市	7月15日	テックス板の設置(136枚)
	7月15日	ベイト剤500ml散布

※予察課対応外も含む

(2) コドリング

ア 調査場所および地点数 筑紫野市、筑後市 合計：2 地点

イ 調査期間及び時期
令和 7 年 4 月～12 月、令和 8 年 3 月の 2 半旬と 5 半旬（期間内 20 回調査）

ウ 調査方法
コドリングの誘引剤コドリングコールⅡを用いたジャクソン型トラップをナシ園近くの施設の敷地内に設置し、誘殺数を調査した。

エ 調査結果 コドリングの誘殺は確認されなかった。

(3) トマトキバガ

ア 調査場所および地点数
(ア) トラップ調査
福岡市、うきは市、筑後市 合計：3 地点

(イ) 見取り調査
福岡市、久留米市、うきは市、柳川市、八女市、筑後市 合計：6 地点

イ 調査期間および回数
(ア) トラップ調査
令和 7 年 4 月～令和 8 年 3 月の 2 半旬と 5 半旬（期間内 24 回調査）
(イ) 見取り調査
令和 7 年 4 月の 2 半旬、令和 7 年 10、11 月、令和 8 年 2、3 月の 5 半旬、令和 7 年 12 月、令和 8 年 1 月の 3 半旬（期間内 7 回調査）

ウ 調査方法
(ア) トラップ調査
トマトの栽培施設周辺にフェロモントラップを設置し、誘殺された疑義虫は交尾器を確認し同定した。

(イ) 見取り調査
トマト栽培ほ場において、目視で被害葉、被害果の有無を調査した。

エ 調査結果
令和 7 年 4 月～令和 8 年 3 月にかけて通年トラップで誘殺が確認された（表 3）。特に 6～7 月および 10～11 月の誘殺が多かった。1 月以降の誘殺は少なく推移した。見取り調査では、発生は確認されなかった。

表 3 令和 7 年度トマトキバガフェロモントラップ誘殺数の推移

調査場所	4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月		1月		2月		3月		合計
	2半旬	5半旬	2半旬	5半旬	2半旬	5半旬	2半旬	5半旬	2半旬	5半旬	2半旬	5半旬	2半旬	5半旬	2半旬	5半旬	2半旬	5半旬	2半旬	5半旬	2半旬	5半旬	2半旬	5半旬	
福岡市	11	7	-	4	34	49	39	61	16	10	20	6	93	46	37	38	14	4	3	4	0	0	5	4	505
うきは市	2	4	6	42	39	133	116	53	28	27	75	80	290	273	172	120	25	20	13	15	0	3	17	11	1564
筑後市	10	7	18	40	45	204	107	77	29	16	29	31	96	57	60	95	29	43	9	7	4	2	10	16	1041

オ 被害状況および防除指導

令和7年5月にトマトほ場において県内初の本虫による食害が確認された。本年度、現地から報告されたトマトほ場での食害発生件数は6件であった。

令和7年4～5月にトラップにおける誘殺数が急増したため、6月11日に技術情報を発表した。また、令和7年5～9月に県内各地でトマトへの食害が確認されたため、10月22日に技術情報を発表した。

(4) *Meloidogyne enterolobii*、columnnea latent viroid (CLVd)、

tomato brown rugose fruit virus (ToBRFV)、トマト退緑萎縮ウィロイド (TCDVd)、
tomato leaf curl New Delhi virus (ToLCNDV)、tomato mottle mosaic virus (ToMMV)、
tomato apical stunt viroid (TASVd)、pepper chat fruit viroid (PCFVd)、pepino
mosaic virus (PepMV)、バナナネモグリセンチュウ、コロンビアネコブセンチュウ、
ジャガイモやせいもウィロイド (PSTVd)、カンキツネモグリセンチュウ

- ア 調査場所および地点数 久留米市、柳川市、筑後市 **合計：3地点**
イ 調査期間および回数 令和7年12月3半旬（年1回調査）
ウ 調査方法 トマト栽培ほ場において、目視で被害の有無を調査した。
エ 調査結果 いずれの病害虫も確認されなかった。

(5) 火傷病菌

- ア 調査場所および地点数
うきは市2地点、朝倉市2地点、筑後市2地点、八女市1地点、筑前町2地点、広川町1地点 **合計：10地点**
イ 調査期間および回数 令和7年4～7月の5半旬（期間内4回調査）
ウ 調査方法 ナシ栽培ほ場において、目視で発病の有無を調査した。
エ 調査結果 火傷病の発病樹は確認されなかった。

(6) カンキツグリーニング病菌、*Spiroplasma citri*、*Xylella fastidiosa*

- ア 調査場所および地点数
(ア) カンキツグリーニング病菌 八女市、みやま市 **合計：2地点**
(イ) *Spiroplasma citri*、*Xylella fastidiosa* 八女市（2地点）、みやま市 **合計：3地点**
イ 調査期間および回数 令和7年4月の5半旬（年1回調査）
ウ 調査方法 カンキツ栽培ほ場において、目視で被害の有無を調査した。
エ 調査結果
カンキツグリーニング病の発病、ミカンキジラミの寄生ともに確認されなかった。

(7) イネミイラ穂病菌、イネ条斑細菌病菌、イネクキセンチュウ

- ア 調査場所および地点数 遠賀町、東峰村 **合計：2地点**
イ 調査期間および回数 令和7年8月の2半旬（年1回調査）
ウ 調査方法 水稻栽培ほ場において、目視で被害の有無を調査した。
エ 調査結果
イネミイラ穂病菌、イネ条斑細菌病菌の発生株、イネクキセンチュウの寄生ともに確認されなかった。

(8) テンサイシストセンチュウ

ア 調査場所および地点数 福岡市、宗像市、北九州市 合計：3 地点

イ 調査期間および回数 令和7年11月の5半旬（年1回調査）

ウ 調査方法

キャベツ栽培ほ場において、目視で被害の有無を調査し、寄生が疑われる株は掘り取って持ち帰り、寄生の有無を調査した。

エ 調査結果 各ほ場においてテンサイシストセンチュウは確認されなかった。

(9) ヘシアンバエ、*Ramularia collo-cygni*

ア 調査場所および地点数

(ア) ヘシアンバエ

糸島市、久留米市、小郡市、嘉麻市、筑後市、築上町 合計：6 地点

(イ) *Ramularia collo-cygni*

糸島市、久留米市、筑後市、築上町 合計：4 地点

イ 調査期間および回数 令和7年4月の5半旬（年1回調査）

ウ 調査方法 小麦栽培ほ場において、目視で被害の有無を調査した。

エ 調査結果 ヘシアンバエ、*Ramularia collo-cygni* ともに確認されなかった。

(10) スイカ果実汚斑細菌病菌

ア 調査場所および地点数 福岡市、北九州市 合計：2 地点

イ 調査期間および回数 令和7年5月、6月の2半旬（年2回調査）

ウ 調査方法 スイカ栽培ほ場において、目視で被害の有無を調査した。

エ 調査結果 スイカ果実汚斑細菌病菌の発病株は確認されなかった。

(11) インゲンマメ萎凋細菌病菌

ア 調査場所及び調査地点数 宗像市、久留米市、柳川市、築上町 合計：4 地点

イ 調査期間および回数 令和7年8月の2半旬（年1回調査）

ウ 調査方法 大豆栽培ほ場において、目視で被害の有無を調査した。

エ 調査結果 インゲンマメ萎凋細菌病菌の発病株は確認されなかった。

(12) ウメ輪紋ウイルス

ア 調査場所および地点数 久留米市 1 地点 合計：1 地点

イ 調査期間および回数 令和7年5月中旬（年1回調査）

ウ 調査方法

(ア) 見取り調査

ウメ栽培ほ場において、ウメ輪紋病発生の有無を目視により確認した。

(イ) 疑似症状又は類似症状等の検定

見取り調査において、疑似症状又は類似症状を呈した葉等が確認されなかったため、各地点から5本ずつ選定し、採取した葉について、門司植物防疫所で検定を行った。

エ 調査結果 ウメ輪紋病の発病樹は確認されなかった。

IV 病虫害防除対策

1 問題となっている病虫害に関する調査

(1) ヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫検定

ア 目的

ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は、平成 23 年をピークに低下している一方で、平成 20 年には国内の土着個体群とは異なる薬剤感受性を有する海外個体群の飛来が報告されている。このため、防除対策を講じる上では、海外からの飛来個体群も含め、本種の薬剤感受性の動向把握が必要であることから、県内の保毒虫率を明らかにし、今後の防除対策の基礎資料とする。

イ 調査方法

(ア) 採集時期：5 月

(イ) 採集場所：県内 13 地点の小麦ほ場

(エ) 採集方法：片振り 200 回のすくい取りによる捕虫

(ウ) 検定方法：簡易エライザ法（小麦穂より採集した第 1 世代幼虫を検定）

ウ 結果の概要

平均保毒虫率は 0.08% で、前年に引き続き低水準で推移している（表 1、図 1）。

表 1 検定地点別のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率及び保毒虫確認ほ場率

検定地点	検定虫数 (頭)	保毒虫数 (頭)	保毒虫率 (%)
宗像市朝町	94	0	0
糸島市二丈松末	94	0	0
久留米市宮ノ陣町	94	0	0
うきは市浮羽町山北	94	0	0
朝倉市馬田	94	0	0
筑前町栗田	94	0	0
遠賀町浅木	94	0	0
糸田町嵐ヶ池	94	0	0
柳川市大浜町(橋本)	94	0	0
柳川市三橋町久末	94	1	1.1
筑後市若菜	94	0	0
大川市諸富	94	0	0
築上町椎田	94	0	0
平均保毒虫率(%)			0.08
保毒虫確認ほ場率(%)			7.69

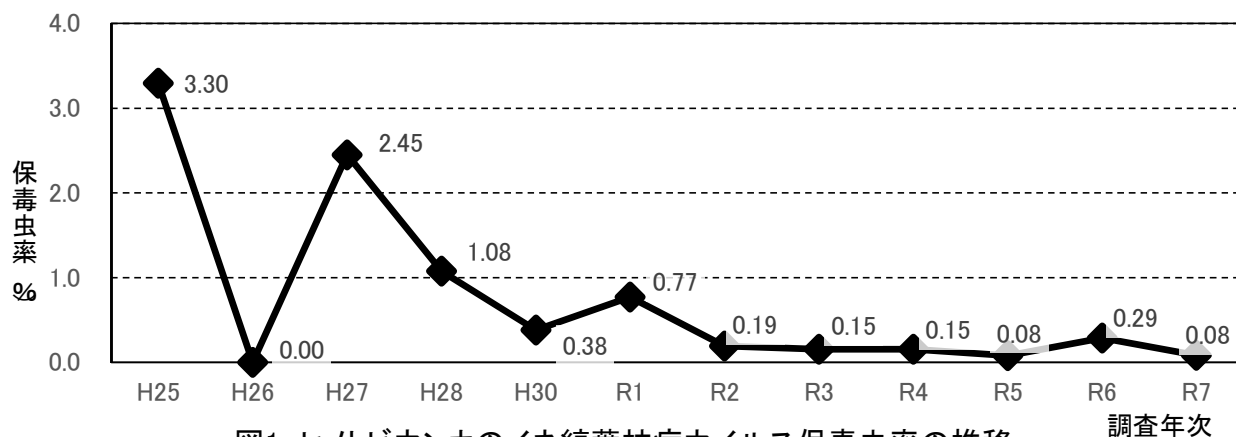


図1 ヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率の推移

(2) 水稻種子のいもち病およびもみ枯細菌病保菌状況調査

ア 目的

水稻種子における、いもち病およびもみ枯細菌病保菌状況を把握し、種子消毒の徹底を促すための指導資料とする。

イ 調査概要

(ア) 実施時期：令和7年12月～令和8年2月

(イ) 調査対象：福岡県米麦品質改善協会から提供された県内15地域の水稲種子（乾粳）

(ウ) 供試品種およびサンプル数

	夢つくし	恵つくし	元気つくし	ヒヨクモチ	つやおとめ	山田錦	夢一献	実りつくし	ツクシホマレ	ヒノヒカリ	合計
いもち病	53	4	37	4	1	2	1	2	3	69	176
もみ枯細菌病	20	1	14	2	1	1	1	1	1	23	65

(エ) 調査方法

a いもち病

1 サンプル当たり乾粳208粒を用い、ブロッター法（君島、1999）にて調査を実施した。

①乾粳は滅菌シャーレに並べ、25℃で3日間、孢子形成させた。

②実体顕微鏡下で、孢子形成の有無を確認し、保菌率を算出した。

b もみ枯細菌病

1 サンプル当たり乾粳50粒を用い、瓦谷らの検出培地(1998)を用い、菌を分離・同定した。

①乾粳は滅菌水5mlを加え、15mlチューブ中で2時間振とう後、振とう液200μlをCCNT培地上に均一に塗布し、41℃で2日間培養、コロニーを形成させた。

②形成されたコロニーは、大きさ別に、松田培地（もみ枯細菌病菌の選択培地）へ画線し、38℃で2日間培養した。

③選択培地上で増殖したコロニーを蛍光発色させ、光学顕微鏡下でシュウ酸カルシウムの結晶が確認されたコロニーを、もみ枯細菌病として同定した。

ウ 調査結果

(ア) いもち病

夢つくしでは4サンプル（同供試サンプルの7.5%）、ヒノヒカリでは5サンプル（同供試サンプルの7.2%）が孢子形成し、保菌が確認された。その他の品種では、保菌は確認されなかった（表2）。

(イ) もみ枯細菌病

夢つくし2サンプル（同供試サンプルの10%）でもみ枯れ細菌病菌が分離・同定され、保菌が確認された。その他の品種では、保菌は確認されなかった（表2）。

エ その後の対応

調査結果を福岡県米麦品質改善協会へ報告。

表2 令和7年産水稻種子のいもち病及びもみ枯細菌病の保菌率

品種	いもち病			もみ枯細菌病		
	調査サンプル数	保菌サンプル数	保菌サンプル率	調査サンプル数	保菌サンプル数	保菌サンプル率
	(個)	(個)	(%)	(個)	(個)	(%)
夢つくし	53	4	7.5	20	2	10
恵つくし	4	0	0	1	0	0
元気つくし	37	0	0	14	0	0
ヒヨクモチ	4	0	0	2	0	0
つやおとめ	1	0	0	1	0	0
山田錦	2	0	0	1	0	0
夢一献	1	0	0	1	0	0
実りつくし	2	0	0	1	0	0
ツクシホマレ	3	0	0	1	0	0
ヒノヒカリ	69	5	7.2	23	0	0

(3) キウイフルーツかいよう病Psa3系統発生拡大への対応

ア 目的

県内で発生地域が拡大している「高病原性のキウイフルーツかいよう病 Psa3 系統」の検定を行い、感染地域を把握することで、伐採・抜根・枝の切除などの対策に資する。

イ 経過

平成 26 年 4 月下旬に県南部において、県内未発生で、他系統より高病原性な「キウイフルーツかいよう病 Psa3 系統」(以下「Psa3」)が確認された。同年での発生は、1 市内の限られた 1 地区のみであったが、翌平成 27 年には県内の 4 市 1 町に発生が拡大し、その後令和元年には 5 市 1 町、令和 2 年には 6 市 1 町、令和 6 年には 7 市 1 町へと発生地域が拡大した。

「Psa3」は、樹液を介して広がり、感染樹からの樹液飛散、剪定器具の使いまわしなどによって容易に拡大する。感染すると花蕾や結果母枝が枯死し、収量に甚大な被害を及ぼす。

平成 26 年発生園での対処は、「発病樹と隣接樹を伐採」もしくは「発病園を全伐採」が基本とされた。その後、平成 28 年までの試験研究や発病園での対応から得られた知見に基づき、「ヘイワード」など比較的かいよう病に強い品種では「発病枝の部分切除」とされた。部分切除後、枝の枯死や葉の褐点症状が生じる場合があったが、樹液の漏出といった収量に影響する重大な被害は生じなかった。一方、「紅妃(レインボーレッド)」などかいよう病に弱い品種や雄木では、部分切除では不十分と考えられ、引き続き『「発病樹は伐採」、『周辺樹も伐採、発病園を全伐採』が基本対応となっている。このため、生産者が自主的に対応する例がほとんどとなり、本病の正確な発生状況把握が困難になっている。

このため、生産者から農協・普及指導センターを介しての検体持ち込み時期は、であった。

ウ 方法

令和 7 年 4～5 月に、生産者から農協・普及指導センターを介しての持ち込み検体を、供試した。なお、本年度は過年と異なり、発病が疑われる樹の発見時期は遅かった。

持ち込み検体の病斑と疑われる部分から DNA を抽出し、J. Rees-George ら(2010)および Balestra ら(2013)の手法に従って PCR 検定を行い、感染の有無と系統の判別を行った。

エ 結果

5 月中旬持ち込み検体である葉サンプルから本年度最初の発症が確認された。

本年度検定を行った 16 検体中 5 検体が「Psa3」陽性を示し、感染が確認された。なお、陽性確認した 5 検体は、過去未発生の単一園地由来であった。前年度の陽性確認は 46 検体中 23 検体で 50%であったことと比較して、本年度は持ち込み検体数も陽性比率も大幅に減少した。

(4) イチゴ炭疽病潜在感染株(親株)調査

ア 目的

イチゴ親株における炭疽病菌の潜伏状況を詳細に把握し、効果的な防除体系を構築するための基礎資料とする。

イ 調査方法

令和 7 年 11～12 月に県内主産地 7 地点の親株床において、1 地点当たり 20 株の親株から、各 1 複葉を採取し、エタノール浸漬法にて調査を実施した。

①検定葉を 70%エタノールに浸漬した後、水洗した。

②大型のポリ容器に滅菌水で湿らせたペーパータオルを敷き、ろ紙上に検定葉を並べて、容器を密封し、28℃の恒温で静置した。

③2 週間後に検鏡し、炭疽病菌胞子の有無を確認した。

ウ 調査結果

親株の潜在感染株率、潜在感染株確認ほ場率ともに前年並であった。

・潜在感染株率 44.3% (前年 64.5%)

・潜在感染株確認ほ場率 100% (前年 100%)

エ その後の対応

令和 8 年 1 月 20 日付けで技術情報を発表し、今後の防除等について周知を行った。

(5) イチゴ炭疽病の薬剤感受性検定

ア 目的

主要イチゴ産地の罹病株から分離した炭疽病菌の農薬に対する感受性を確認し、生産現場で甚大な被害を生じている炭疽病に対する有効な防除対策の構築に資する。

イ 調査方法

令和6年度と7年度に県内で発生したイチゴ炭疽病の罹病株から分離した炭疽病菌 64 菌株に対して、平板希釈法にて、薬剤感受性検定を実施した。

表1 供試薬剤および判定方法

供試薬剤 (FRACコード)	商品名	培地添加 濃度 (ppm)	感受性低下菌（耐性菌） の判定方法
アゾキシストロビン(11)	アミスター20フロアブル	100	菌糸伸長あり
ベノミル(1)	ニマイバー水和剤 ^{注)}	100	菌糸伸長あり
ジエトフェンカルブ(10)		100	菌糸伸長あり
フルジオキシニル(12)	セイビアーフロアブル20	1	菌糸伸長率が無添加比70%以上

注) ベノミル・ジエトフェンカルブ剤について、ゲッター水和剤も同一系統の薬剤である。

ウ 調査結果

- ・供試した菌株の 76.6%がアゾキシストロビン耐性であった。
- ・供試した菌株のうち、ベノミル耐性でジエトフェンカルブ感受性（R・S）菌株は 57.8%、ベノミル感受性でジエトフェンカルブ耐性（S・R）菌株割合は 37.5%であった。
ニマイバー水和剤やゲッター水和剤に耐性ありと判断される両剤耐性（R・R）菌株は 4.7%（64 菌株中 3 菌株）であり、同 3 菌株は全てアゾキシストロビンに耐性を示した。
- ・フルジオキシニル耐性菌株は 1.6%（64 菌株中 1 菌株）で、同菌株はアゾキシストロビン、ベノミル、ジエトフェンカルブのいずれにも耐性を示した。

表2 県内のイチゴ炭疽病菌の薬剤感受性検定結果

	供試 菌株	アゾキシストロビン	ベノミル・ ジエトフェンカルブ			フルジオキシニル
		R ^{注1)}	R・S	S・R	R・R	R
菌株数	64	49	37	24	3	1
割合（%）	100	76.6	57.8	37.5	4.7	1.6

注) R：耐性、S：感受性

エ その後の対応

本検定結果は令和8年2月10日付技術情報で発表、今後の防除に関する情報提供を行った。

(6) トマトにおけるタバココナジラミのウイルス保毒虫検定

ア 目的

タバココナジラミが媒介するトマト黄化葉巻ウイルス（以下 TYLCV）およびトマト退緑ウイルス（以下 ToCV）の保毒虫率を調査して、防除対策の構築に資する。

イ 調査方法

令和7年7月8日～8月20日に、うきは市吉井町のトマトほ場（1ほ場）周辺に設置した黄色粘着板トラップで捕獲されたタバココナジラミ 51 頭を検定に供試した。

供試虫は、個体別に PCR 検定し、TYLCV および ToCV の保毒の有無を確認した。

ウ 調査結果

TYLCV 保毒虫率は 3.9%、ToCV 保毒虫率は 5.9%であった。

エ その後の対応

本検定結果について県内指導機関に周知し、今後の防除に関する情報提供を行った。

(7) キュウリにおけるタバココナジラミの薬剤感受性検定

ア 目的

キュウリにおけるタバココナジラミの薬剤感受性を調査し、今後の防除対策資料とする。

イ 調査方法

2025年6月10日に施設キュウリ主要3産地および施設ダリア1産地から採集したタバココナジラミ成虫を検定に供試した。検定薬剤を表1に示した。供試薬剤には、展着剤としてアグラー（ポリオキシエチレンアルキルフェニルエーテル剤）5000倍を加用した。無処理区は展着剤のみを加えた蒸留水を用いた。薬剤処理の3日後に判定を行った。「令和7年度版病害虫雑草防除の手引き【野菜】防除方法の試験研究成果等Ⅱ－7」に準じ、ナス葉を薬剤に浸漬する方法で検定した。

ウ 調査結果

各供試薬剤の補正死虫率を表2に示した。ベストガード水溶剤は、全地域の個体群で補正死虫率が80%以下となり、殺虫効果はやや低かった。ディアナSC、アグリメックは、全地域の個体群で補正死虫率がおおむね80%以上となり、高い殺虫効果を示した。ヨーバルフロアブルは、全地域の個体群で補正死虫率が10%未満となり殺虫効果は低かった。

エ その後の対応

令和7年10月31日付技術情報を発表し、今後の防除対策などに関し周知した。

表1 供試薬剤

供試薬剤（IRACコード）	有効成分・含量（％）	希釈倍率（倍）
ベストガード水溶剤(4A)	ニテンピラム・10	1000
ディアナSC(5)	スピネトラム・11.7	2500
アグリメック(6)	アバメクチン・1.8	500
ヨーバルフロアブル(28)	テトラニリプロール・18.2	2500

表2 各供試薬剤に対するタバココナジラミ成虫の補正死虫率（％）

供試薬剤（IRACコード）	補正死虫率（％）		
	A地区	B地区	C地区
ベストガード水溶剤(4A)	74.4	75.6	68.8
ディアナSC(5)	79.5	98.2	90.2
アグリメック(6)	97.6	98.5	100
ヨーバルフロアブル(28)	0	0	3.0

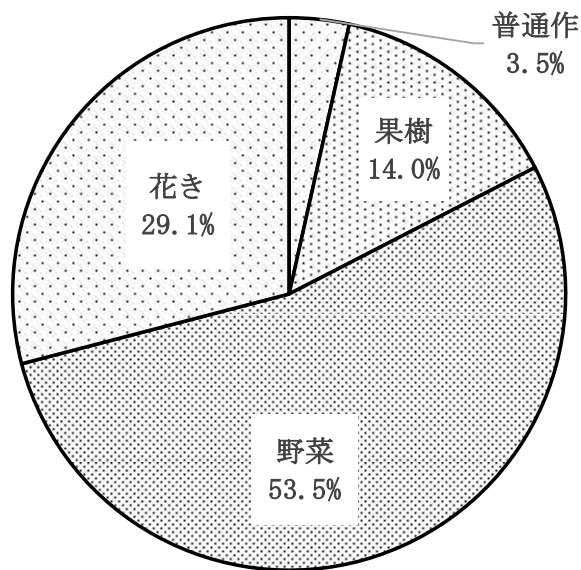
2 病虫害診断

(1) 作物別依頼件数と診断結果

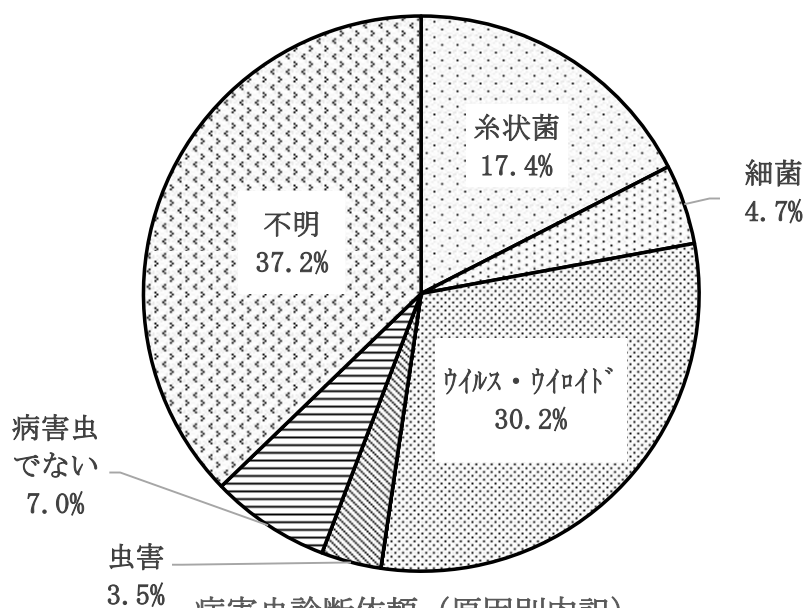
令和7年4月から令和8年3月までの診断依頼件数は合計86件であり、その内訳は普通作物3件(3.5%)、果樹12件(14.0%)、野菜46件(53.5%)、花き・花木25件(29.1%)であった。

各作物ごとで多かった診断依頼品目は、普通作では大豆の3件、果樹ではいちじくの4件、野菜ではトマト類の22件、キュウリの10件、花き・花木ではキクの6件となっている。

原因別に内容をみると、病虫害が原因であるものは48件(55.8%)で、その内訳は、糸状菌15件(17.4%)、細菌4件(4.7%)、ウイルス・ウィロイド26件(30.2%)、虫害3件(3.5%)となっていた。なお、6件(7.0%)は病虫害が要因ではなく、32件(37.2%)が不明であった。



病虫害診断依頼（作物別内訳）



病虫害診断依頼（原因別内訳）

令和 7 年度 植物防疫年報

令和 8 年 9 月 発行

編集・発行 福岡県筑紫野市大字吉木 587

福岡県農林業総合試験場病虫害部予察課

福岡県行政資料

分類番号 P A	所属コード 4 7 0 3 7 1 9
登録年度 8	登録番号 (0 0 0)

リサイクル適正



この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。